
古神道

ATS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古神道

【Zコード】

Z6050D

【作者名】

ATS

【あらすじ】

閉ざされた学園の中で起きた事件。それを調査するために、一人の少女が学園に降り立つ。それは事件なのか事故なのか
狂つてゆく人間関係の中に、事件の真相はあるのか。事件の影に潜む呪術の存在。陰陽師の乃至は、最後までこの事件を追う事が出来るのか。現代学園ファンタジーの幕開けです。

其の一

往く者

街は都心から離れているものの、意外と利用客の多い駅を中心としてそこそこ賑わいを見せていた。とは言え、大都市の様な不夜城の街という訳でもない。

賑わいを見せる地域は駅周辺の一部だけで、少しでもそこを外れば、途端に喧噪とは無縁の静かな住宅地に出る。

そして、さらに車を走らせれば、10分も経たない内に山間の寂れた風景へと変化する、そんな多面性を持つ街であった。

しかしそれは街の一つの売りでもあった。

駅から15分という手軽さで雄大な自然の残る山々を満喫する事が出来ます という宣伝文句の通り、手軽に山へと出られるからである。

山は街を北側からぐるりと取り囲む様にして連なつていて、春には新緑が目にまぶしく、秋には紅葉が燃える様に鮮やかで、それを楽しみに散策に来る者も少なくない。

ただし、それらを楽しめるのは山の入り口付近だけで、山の麓まで来ると、実際に登ろうとする者は少なかつた。

それは、山にどこか人を拒む気配があつたからだった。

確かに遠くから見れば山は綺麗であった。山間を、ゆつたりとしたカーブを描きながら流れれる清流も見る者の楽しみの一つである。

しかし、山に近づけば解るはずである。いかにこの山々が険しいかが。

雄大な自然を湛える緑の山　　は、言い換えれば光すら通さぬ程の森深き地であり、整備されていない場所も多くて人を拒む黒き樹海の「」ときであった。

不気味

とは違うのだが、どこか容易に近づく事をためらつ……そんな雰囲気を湛えているのだ。

そんな山々へ抜けるには、清流と平行して走る道を行く。

清流は街のもう一つの象徴となつてゐるだけあって、豊富な水量と透明度の高さは相当のものがあつた。

途中、何度か支流に分かれたり合流したりと、幾筋かの流れが絡まりあうのだが、それがまた自然の妙を醸し出していて美しい。

そんな清流は大きく分けて三本の流れから成り立つていて、それに車が通れる道が平行して走つていた。

まずは一つ目の道。

この道は途中何度か道幅が狭くなつてすれ違いに苦労する場面があるのだが、都内の外れへ直接出られる利便さからか、まあまあの交通量がある道であった。

一つ目は都内へ抜けるそれとは正反対に伸びていて、隣の市へと抜ける唯一の国道であつた。この道は他の二つとは違い、国道と言うだけあって格段と交通量が多い。しかし、街と街をつなぐ重要な産業道路は交通事故も多く発生し、悩みの種となつてゐるのも事実である。

そして三番田の道だが、これは前出の一ひとつは少々毛色が違つていた。

一応舗装もされ、バスなどの大型車同士では苦しいが、狭いながらも乗用車同士ならば違う事も出来るきちんとした道であるのだが、その道を利用する者は極端に少なかつた。

それもそのはずである。道は、前述の一本の様にどこか他の地域へと抜けられる訳ではなく、純粹に山の麓へと出るだけの道だからである。

その昔、街は林業が盛んな時代があったのだが、その時はまだ木材などの搬出で大層な賑わいを見せていた。しかしそれも、林業の衰退と共に街そのものも寂れていった。

私立佐久間学園は、そんな道の終点から登る、山の中腹に位置していた。

学園のある山の高さはどれ程であろうか。一応学園の前までは舗装された道路が整備されていて、学園前にはバスの転回所も用意されているのだが、頂上を目指すそこからは徒歩になる。

山の麓から学園までは車で10分ほど。

そこから頂上まで歩く場合、健脚の者でも小一時間程度はかかると言つ。それ程の高さと言つ訳でも無いが、さりとて簡単に登れる様な山では無い　　と書ひ山だつた。

周囲の山などでは建材用の杉が植林されていたが、学園を中心とした三つの山では落葉樹が多く、それこそ紅葉の時期には観光登山者がカメラを片手に結構な賑わいを見せる。

ただし、大概の者が学園前のバス停まで来ると、さりとて上を目指す様な事は無く、そのままバスに乗つて帰つていつた。

バスで10分と言う道のりではあるが、実際に歩くと、斜面のキツさに音を上げる者が殆どであるからだつた。

そんな山であるから、佐久間学園の生徒は誰一人として徒歩で通う者はいない。もつとも、一部の地元生徒などを抜かして全寮制を取りつている学園なので、通学の心配は無かつた。

ただ、土日を利用して麓の街や実家に帰っていた者が、終バスに乗り遅れて仕方無く歩くケースはあつた。

それこそ昔は、材木問屋やそこで働く者の為にバスの路線が多少なりともあったのだが、今では利用客の大半が学園の関係者で、山の麓のバス停止まりの便はいくつかあるモノの、学園前まで来る便是数本しか無い。

よつてそれを逃した生徒などが徒步で登る事になるのである。

これは地元の人間や、学園の関係者ならば誰でも知つてゐる事であつたが、不意の来訪者に取つては全く知らされておらず、生徒同様に後悔する羽目になる。

佐久間学園は私立の有名学園と言う事もあって転校して来る者も多いのだが、それらは必ずと言って、学園までの道のりを徒步で歩かされることになる。

そして今日も一人、そんな山道を徒步で行く少女の姿があつた。

五月の始めだと言うのに日差しが強く、山道を行けば直ぐにでも汗が噴き出して来るほどの暖かい日、少女は額に汗一つ浮かべるでも無く、楚々とした表情のまま学園へと向かって歩いていた。

年の頃はちょうど高校生くらいだろうか、吸い込まれそな程の漆黒の瞳と、同じく艶のある長い黒髪が、知的な雰囲気を醸しだしていた。

少女は少し、年齢よりも大人びて見えるタイプだつた。

何かの習い事でもしているのか、スッと伸びされた姿勢の良さが、大人びた雰囲気に拍車を掛けているのかも知れない。

きつとあの娘も、知らずに来てしまったんだが、……

男は過去の経験から、そんな少女の姿を見てとった。

男は学園の購買へ納品している業者なのだが、年に何度か、この様に徒步で登る者を見てきた。大概は転校してきた生徒とその親と言つ取り合わせで、後は背広を着たセールスマンらしき者、登山者風の者、それぞれである。

「佐久間学園へ向かうんかい？」

男は少女の隣に車を止めると「ここから学園までは結構あるんだ、良かつたら乗つていくかい？」と、声を掛けていた。

何度かこうやって徒步で登る者を助けた事がある。

大概の者が半分も行かない内に後悔するのを知つていたし、車の者が徒步の者を乗せていくのが、地元では半ば暗黙の了解の様になつていたからだ。

声を掛けられた少女は歩みを止めると、声の主へと向き直つた。見れば、額に汗の一つもかいだ様子がない。季節は春を過ぎたばかりで爽やかな気候とは言え、かなりの上り坂を徒步で来たとは思えない程であった。

少女はその顔と同様、涼やかな微笑みをたたえると

「ありがとうございます。ですが今日の様に清々しい日には、いつも森の間を歩きたいと思います。どうぞお構いなく」と言つた。

最近の若者にしては丁寧な応対をするものだ 男は丁寧な受け答えに感心すると同時に、凛として良く通る声に、一瞬、背筋がゾクツとする様な何とも言えない不思議な感覚を覚えた。
「だ、だけど、ここからだとまだまだ遠いよ。見た目はなだらかで良いけど、学園へ着く頃にはこれが結構疲れるんだ」

実はこの男もまた、山の麓から佐久間学園まで一度歩いたことがあつた。

これでも普段から歩く事には自信をもつていたハズなのだが、以外とこの先からが長い 男はその時の事を少女に語つた。

「心配ありがとうござります。ですが、足には自信がありますので」

しかし少女はそれでも大丈夫だと男の申し出を断つっていた。

「そうかい？ それじゃ無理にとは言えないな……ところで君は転校生？」

「はい、今日から佐久間学園へ転校して参りました」

「やつぱりそうか……いやね、佐久間学園は私立だから結構転校生とかが来るんだけど、中にはこの山道の事とか知らない親子がいてね。バスで下の雑貨屋までは来るんだけど、そこから歩かなくてはならないのを聞いて、わざわざタクシーを呼ぶ人もいるんだ。俺も何度かそんな親子を乗せたことがあってね、君もその口かと思つたんだよ」

男がそう言って気をよく笑うと、少女もつられたように微笑んだ。それは近頃の女子高生の様に、大きな口を開けて所構わず下品な笑い声をあげるモノとは違っていた。少女は軽く口に手を当てる、愛想笑いとも思えぬ微笑みで答えるのである。

いかにも絵になつた。

男はそんな少女の微笑みを見ていると、なぜだか清々しい、不思議な感覚に陥る。

佐久間学園には金持ちの令嬢子息が多いって事だが、きっとこの娘はそう言う家の育ちなのかも知れない 男は、少女の立ち居振る舞いに、どこか普通とは違つたモノを感じとつていた。

しかし……どこかの令嬢にしても、余程礼儀作法に厳しい家に生まれているのだろう。普通の高校生ならば丁寧な物言いが逆に不自然に見えるものだが、この少女は全く自然で清々しい。スッキリと

した美人顔に、黒く、癖のない長髪が大人びて見えるが、それがいかにも似合つていて好感がもてる。

そして何よりも、真っ直ぐ見つめて来る瞳が吸い込まれそうなほどに　男は一瞬、我を忘れて少女を魅入つていたが、五月の一陣の爽やかな風に救われた。

「さ、さてと、それじゃ俺は先に行くけど……そうだ、君の名前とか聞いても良いかな？　これから、学園で会うかも知れないしね」男は少女に魅入つてしまつた事を誤魔化すかの様に、少し大きな声でまくし立てるようにしゃべつていた。

「ええ、かまいません」

少女はそんな男を気にするでもなく、相手の瞳を真っ直ぐに見据えながら答えた。

私の名前は　　榊、榊乃亞と申します。

其の一・始まりの夜

はじまりの夜

和田美智子が壁掛けの時計に目をやると、針は後少しで10時を指そうと言つところだつた。

「あら、もうこんな時間なのね」

夕食後、友達の国府田雅美に誘われて、彼女の部屋で紅茶を楽しんでいた美智子だったが、佐久間学園の寮では10時以降は自室に戻つていなくてはならないと言つ規則がある。

そろそろお茶会もお開きの時間なのであった。

そんな美智子の声につられ、雅美も時計に目をやると

「本当だ……早いよね10時なんて」

と、未練たっぷりの言葉をはいた。

「でも仕方ないわ、寮規なんですもの」

私立佐久間学園に通う生徒は、地元の生徒と「一部の例外を除いて、全員が寮に入つて生活をしている。寮には昔ながらの規則があつて、生徒はそれを遵守しなければならなかつた。

とは言え、今時の高校生に取つて、夜の10時などはまだまだ宵の口にもならない時刻である。雅美にしてみればただでさえ娯楽の少ない寮での生活、寮規の遵守よりも、退屈な時間をいかに過ごすかの方が大問題であつた。

「ね、もう少し寄つてかない?別に見回りが来るわけでも無いんだし……」

そう、寮規とは言つモノの、別に教師達の見回りがある訳ではない。全ては生徒達の自主に任せられている。

よつて、規則を眞面目に守っている生徒もいれば、そうでない者

もいるのだが、和田美智子に関して言えば雅美の誘いに乗る事はまず無かつた。

「ごめんね、私ももう少しお邪魔していいんだけど、少し気が少しだけで終わりそうに無いから……今日はもう戻るわ」

「もう、美智子は優等生なんだから」

雅美はわざとらしく頬を膨らませたが、その実、和田美智子は本当に優等生だった。

佐久間学園は、各界の有力者や旧華族と言つた家柄の令嬢子息が集まる事で有名なのが、美智子はまさに、その代表的な存在だった。

美智子の父である和田道広は、経済界では知らぬ者の無い資産家であり投資家で、資産総額は何十億とも言われている。しかも家柄は、江戸時代から続く旧華族と言う格式を持ち、佐久間学園の中でも指折りの中に入っている。

そんな家に育つた美智子は、父親の道広から『自由奔放に育てすぎてお転婆が直らない』などと言われているモノの、どうして、学力は常に学年上位に顔を出すし、お茶やお華はもちろん、礼儀作法などにも一通り精通した立派なお嬢様であった。

とは言え当人は、そんな事などおくびにも出さず、誰とでも明るく気さくに付き合う。そんな性格の良さは、男女を問わず好かれる要因となっていた。

「それじゃ、また明日ね」

雅美のわざとらしい表情につられて微笑みながらも、やはり美智子は腰を上げる事になった。

背中まで届くセミロングの黒髪が軽く揺れる。

「ま、しょうがないか」

雅美も今度は引き留めなかつた。

雅美は江戸っ子の父親に育てられたからか、いつ言った時に、未

練たらしに事を引きずるような事は無かつた。たとえ一度は引き留めようとしても、他人に無理強いする様な事はしなかつたし、気持ちの切り替えも早く出来るのである。

雅美は美智子の様に財閥の出でも無ければ華族と言つ訳でもない。性格も父親の血を引き継いだのか、佐久間学園では珍しくチャキチヤキの江戸っ子と言つた活発な女の子で、性格の通りに髪の毛も短めにしている。

こんな正反対の様な性格の二人だが、和田美智子には、そんな雅美の竹を割った様な性格と常識をきちんと持ち合わせているところが性に合つのか、入学してからのつき合いで、既に何年も一緒に過ごしてきた様な親友同士の関係になっていた。

「それじゃまた明日。気を付けてね」

一人の部屋は、空き部屋を挟んで一つしか離れていないのだから、気を付けるも何もないのだが、雅美はドアの外に出て美智子を見送つた。

コレはどうやらが遊びに行つてもそうなのだが、お互いが、お互いの部屋の中に入るまで見届けるのが習慣になつていてるのである。

その日の夜も、いつもの様に雅美は美智子を見送つた。

じゃあね　　と、美智子も手を振り返す。

そして一人は、お互いがお互いの部屋の中へと入るのを見届けたのであつた……

「なんだか、外が騒がしいな……」

雅美が異変に気が付いたのは、明日の予習をしていて、ちょうど一息入れようかと思つた時だつた。

寮規が緩いとはい、学力試験まで優しいわけでは無い。むしろ佐久間学園は試験に関しては厳しい方で、結果如何では直

ぐにでも補習などの罰が待つていて。それだけは避けようと、雅美は嫌々ながらも勉強していたのだった。

10時を少し回つてから始めたから、ちょうど一時間。一つの教科が終わり、キリの良い時間と言う事もあって紅茶でも飲もうかと思つた時だった。

紅茶通の美智子からもらつた高級な茶葉を使おうと、電子調理器の上にポットを載せた時である。廊下から、何やら人の悲鳴の様な音が聞こえてきたのであつた。

「な、なんかあつたのかな……」

学園の寮では大きな声を出して騒ぐことは禁止されている。第一、この寮の中でそんな事をする生徒は居ないはずである。

雅美はその騒ぎ声が気になつて、外の様子を確かめようとドアのノブに手を掛けた。瞬間、今までの様な騒がしさとは違い、緊迫した声が飛び込んできた。

「イヤア　！　！」

夜の静寂を切り裂くかの様な悲鳴に、一瞬、ドアノブに手を掛けたまま固まつてしまつたが、次の瞬間、雅美は一気に部屋の中から飛び出した。

「み、美智子！？」

驚いた事に、そこには、怯えながら必死に何かから逃げ出そうとしている和田美智子の姿があつた。

「どうしたの美智子！」

雅美が近寄ると美智子は、今度は大きく手を振つて、何かを追い払おうとしている。

その激しさは、見ていて異様だつた。

目の前にいる自分の存在には気が付かず、何もない空間に向かつ

てうつろな視線を向けて大きく手を振りながら、何かを追い払おうとしている姿はどう見ても異様としか思えなかつた。

しかし雅美は、辛うじて友人を助けなくてはという思いが働いたのか、まずは美智子を落ち着かせようと、振りかざす手を押さえ込もうとした。

「ちょ、ちょっと美智子、落ち着いて！！」

しかし、必死で抵抗する人間を押さえ込む事は至難の業である。巧く押さえることが出来ない。

「どうしたって言うの！？」

雅美は、彼女がどうして怯えながら悲鳴をあげているのか解らなかつたが、とにかくこのままでは埒があかない、取りあえず落ち着かせようと、美智子の手を押さえ込もうとした。しかし、抵抗が思いの外大きく上手く行かない。

体格的にはあまり変わらない雅美だったが、美智子の力が思いの外強かつたのだ。

と、とにかく落ち着かせなきや……でも手を押されたのじゃダメだわ 雅美は美智子の抵抗があまりにも激しかつたので、手を押さえる事を諦めた。その代わり、美智子の体を強く抱きしめてとにかく座らせようとした。

「美智子、落ち着いて！ 美智子！！」

雅美が耳元で大きな声を出したが、しかし美智子は一向に落ち着く様子を見せない。

「解る？ 私よ美智子！ ね、落ち着いて」

この騒ぎに、他の寮生達が気が付かないはずはない。しばらくすると、各部屋から何人かの生徒達が顔を出してきた。

がしかし、美智子の異様な様子を見て状況が掴めなかつたのか、誰もどうして良いか解らずに、近づく事も躊躇つている。

そういうしている間にも、美智子は何かに抵抗するかのように、めきながら、大きく体を左右に振り続けていた。

「先生を呼んで来て！早く！…」

たまらず雅美が叫ぶと、三人の同級生達が階下に走った。
「美智子、解る？私よ、落ち着いて！ね、とにかくもう大丈夫だから…！」

周りに集まつた者の中には好奇の目を向ける者も居たが、そんな事はお構いなしだ。雅美は美智子に向かつて呼びかけ続けた。
すると美智子は、一度体を大きく揺らしたのち、一気に体の力が抜けたかと思うと、そのまま気を失つた。

私は私よ……誰のモノでもない

「なに？美智子！私は私つてどういう事？」

雅美は、和田美智子が氣を失う直前に、そつ啖くのを聞いた気がした。

「以上が、和田美智子の親友であり、今回の騒ぎに居合わせた国府田雅美および、周囲で見ていた生徒達の話をまとめた結果です」

場所は学長室、赤岡は寮で起きた事件の報告を受けていた。

「その後、生徒達に呼ばれた真鍋先生まなべが対応し、一端は保健室で様子を見ていたのですが、和田美智子が一向に目を覚ます気配が無かつたので、急速救急車を呼んで友田総合病院へ搬送したと言う事です」

「そうか……やむを得まい、生徒の方が大切だからな。で、ご両親への連絡と友田院長へは？」

「はい、ご両親への連絡は友田病院へ搬送された時点で完了しています。それから院長先生へは、この事が外部に漏れない様に話を付けておきました。もつとも、和田氏と院長先生はお知り合いだからで、その点は、先生の方が心得て下さいました」

「ありがとう。それで良い」

赤岡は革張りの椅子に、深いため息と共に身を沈めた。

報告しているのは、佐久間学園で事務をしている菊池という青年だつたが、赤岡が信頼を寄せるだけあって、的確な対応の仕方だった。

細かい所まで気を遣い、何より迅速に対応するのが良い　今回の事に関しても赤岡は菊池の対応に満足していた。

しかし……それで事件の処理が終わつたわけではない。

赤岡はこれから的事を考えると頭が痛かつた。

佐久間学園は古くから続く全寮制の、知る人ぞ知る名門校である。各界の実力者や、旧華族と言つた家柄の生徒が集まり、それがまた評判を呼ぶのか、決して安くはない入学金や寄付を払つても多くの入学希望者がいた。

少子化の昨今、名門と呼ばれる私立校でも生徒を確保するのは難しくなつていて、そのため、そう言つた点、佐久間学園は恵まれていた。

しかし、だからこそ今回の様なトラブルは致命傷にもなりかねない。

名門と呼ばれる家系が一番に気を遣うのは体面だ。

それは古ければ古い程に異常なまでの執着を持ち、そしてそれに對しての嗅覚も鋭かつた。だからこの様に、事件と呼ばれるモノが一番嫌われる所以である。

噂とは怖いモノで、一度悪い噂が立つとそれは瞬く間に世間に広がる。

しかも噂は、人々の想像や思惑によつて勝手に一人歩きし、ドンドンと悪いイメージばかりが強調されてしまうのだ。

もちろん、システムの面で不備があるのならば学園側が悪いとも言えるのだが、生徒個人が引き起こした事件でも、学園の責任を問われる事がある。

なので、今回の様なケースではキチンと原因を究明し、早急にしきるべき対処をしておかなくてはならない。

赤岡はその点の処理の仕方には自信があつた……が、現時点では情報が少なすぎて手の打ちようがない。

和田美智子が意識を回復するのを待ち、本人から事情を聞くのが一番なのだろうが、それだけでは済まないのではないか　と、赤岡は彼自身の持つ勘がそう囁くのを感じていた。

「それで……和田美智子君の容体は？」

本来ならば一番最初に確認しなければならない事であつたが、だからこそ、聞くのが怖かった。なぜなら、和田美智子が変質者などの何者かによつて襲われたのではないか？　と、そう思ったからである。

もしその予想が当たつていたならば、学園始まって以来の大事件であるし、正に命取りともなりかねない出来事である。

全寮制の学園にとつて保護者への信頼感を失う事は死に等しい。赤岡が確認するのを躊躇うのも、そんな恐怖感からだつた。

菊池もその点については十分理解しているのだろう、昨晩、美智子が病院へ搬入された時点で直ぐに駆けつけていたし、今日の朝も、病院へまわつて彼女の容体を聞いていた。

「はい校長、その点に付いては心配無いそうです。今はまだ、意識を回復していませんが、彼女に外傷らしきモノはなく、昨晩の騒ぎの時には衣服に乱れた形跡がありました、それは取り押さえる時

のものと並べ」とです

「う～む……」

赤岡は、ひとまず最悪のケースだけは回避出来たという安堵のため息を付いたものの、事件の事を思うとやはり気が重かつた。

「菊池君、それで彼女が今回の騒ぎを起こした原因は、何か分かったのかね？」

「いいえ、そこまでは」

そもそもどうだろう、昨晩の事件は突発的な出来事であつたし、逆に、短い間でこれまで状況を把握している菊池は、まこと優秀と言つて良かった。

「しかし……」

菊池は、彼にしては珍しく語尾を濁した。

「しかし？　何かあつたのかね」

そんな菊池の態度に、赤岡の不安が増した。

「いえ、和田美智子が病院へ搬入される時、国府田雅美が彼女の部屋に着替えなどの必要なものを取りに入つたらしいのですが、その時、部屋の窓が全開になつていたそうです」

「窓が全開に？それが何か問題なのかね」

赤岡は意味が判らず問い合わせていた。

「はい。まさかとは思いますが、もし犯人がいた場合、窓から逃げた事も考えられます」

「しかし……確かに和田美智子君は一年生だろう、部屋は寮の最上階。5階の中央に近い所だと聞いているが、その高さで考えられるのかね？」

「考えられない事でもありません。窓の外には、ちょっととした底が出ていて、気を付ければ人間が動き回る事も出来ます」

「だが、底はそれ程幅があるわけでは無いだろう。それに、隣の部屋の底とは間があいているし、一時的に身を隠す事が出来たとしても、そこから逃げ出すことは困難だと思えるが……」

赤岡は寮の建設にも関わっていたから、底の状況が手に取るよう

に判つていた。

寮の庇はしつかりしていて、一時的に身を隠す程度ならば問題は無い　ただし、隣の部屋の庇へは、ちょうど50㌢程度の間があいているのだ。

地上での50㌢ならば大した距離ではないが、5階という高さで、しかも狭い庇の上では並の距離ではない。余程高い所に慣れた者でなければ、とても移動出来る距離とは思えなかつた。

「ですが、可能性としては完全に無いとは言い切れません」

菊池にしても信じられないという思いの方が強かつたのだろうが、彼は、問題を調査する上で、どの様な可能性でも考慮に入れなくてはならないと考えている様だつた。

「もしも今回の事件を調査するのでしたら、多角的な視点で行うべきだと思うのです」

確かに、世の中には常識で計れない事もある。

赤岡のような立場にいると、無意識に常識に捕らわれたり、学園の都合の良い方向で物を考えがちで正しい判断が出来なくなりがちだつた。

「うむ、君が言いたいことは解つた。どちらにしても、今回の件は徹底的に調査して原因を究明し、何らかの手を打たねばなるまい」
この時既に、今回の件はこの男に調査させよう　赤岡はそう思つていた。

事件が起きてからの対応や処理のしかた、原因に対する考え方を見る限り、菊池は実に優秀な人間だと評価を新たにしたからだ。
「菊池君、本来の仕事からは外れると思うが、今回の件は君に調査してもらいたいのだが」

赤岡としてはこれ以上無い人選だつたし、菊池にしても望んでいた節がある。

全力を尽くします　　と、菊池は自信溢れる顔で答えるのだが

た。

つづく

其の三・兆し

兆し

「そう、じゃあやつぱり、君もそれ以上の事は分からんんだね？」
「はい……美智子とは10時に別れて、それからあの騒ぎがあるまで会つていません」

菊池はさっそく事件の調査を開始していた。

赤岡の信頼に応えたいという気持ちもあったのだが、自身、難しい問題に直面すると逆に闘志がわいてくる性格なのである。それに、問題に対しても早め早めに行動しないと気が済まない……そんな性格も手伝っていた。

そんな菊池が一番最初にした事は、もう一度、あの夜の事を当事者達へ聞き直す事だった。

人間の記憶と言うモノは面白く出来ている。記憶は、時が過ぎるに比例して薄れて行くモノだが、直前の映像を全て思い出せるかと言えばそうでもない。

特に学習の為の記憶では、一度時間を置いた方が理解度が高くなる場合もある。それと同じ事かは解らないが、冷静になつた今だからこそ、思い出す事があるかもしれない」と、菊池は考えていたのだ。

しかし現実には、そつそつ都合良く行くわけではなく、あまり成績は上がらなかつた。

和田美智子と一番仲が良く、事件の第一発見者でもある国府田雅美なら何か心当たりがあるかとも思われたが、彼女は叫び声に気が付いて飛び出しだけで、それ以前の事は全く知らないと言うのだからしようがない。

国府田雅美に期待していた部分もあったのだが、どうも、そう簡単に行きそうになかった。

「最近、和田美智子君が悩んでいるとか、そう言つた話は聞いたことは無いかい？どんな些細なことでも構わないのだけれど」

それでも一応、多角的に情報は収集しておくべきだ。

「美智子が悩むなんて、そんな事は絶対に無かつたと思います。確かに誰でも悩みの一つや二つあるかも知れないけど、勉強だつて常に上位だつたし、経済的な面で悩むような家じやないし……そんな事で悩むんだつたら、よっぽど私の方が悩み事が多くて夜も眠れません」

雅美は冗談のように言つたが、友人の事が心配なのか顔は笑つていなかつた。

菊池はそれからいくつかの質問を続けたが、結局、収穫になるような話は聞くことが出来なかつた。いや、和田美智子がノイローゼになるような悩みを持つていなかつた事が分かつただけでも収穫だつたのかも知れない。

つまり、和田美智子が、自身の問題である様な騒ぎを起こしたのではなく、何かしらの外的要因が引き金になつた可能性が高い事が分かつたからである……

しかしそれは、菊池や学園に取つて望まない結果だ。

これはやつかいな事になるかも知れない この時菊池は、最悪のシナリオも考えなくてはならないと思つていた。和田美智子自身の問題でないとすると、やはり暴漢の説が浮上してくるからである。

菊池は国府田雅美からの話をあきらめると、今度は和田美智子の部屋の調査をする事に決めた。

本来ならプライバシーに関わる面からも、菊池自身のポリシーからも気の進む事では無いのだが 菊池は、和田美智子が未だ意識

を取り戻さず眠りに付いている時、電話で彼女の父である和田大造に、部屋を調査することの了解を得ていた。

後々になつて気変りをされたり、和田美智子自身が事件の真相を隠してしまわないかを心配したことだつた。

こういつた先々の事を、菊池は時として行き過ぎの様に思われても手を打つておくタイプなのである。

事件のあと、部屋には誰も入れない様にと鍵をかけてあつた。部屋に入るには、寮の管理人が持つてあるマスター・キーか、菊池自身が持つている鍵を使うしか無い。

「これも調査の為には必要な事だ」と、菊池は自分を納得させる為か、小さく声に出してから、一呼吸置いてゆっくりと鍵を回した。

佐久間学園の寮は、寄付金が十分に集まる事もあつて生徒一人ずつに個室が与えられている。広さこそそれ程でもなかつたが、クローゼットは備え付けのものがあつたし、冷暖房はセントラルヒーティングによる集中管理。各部屋にはユニットバスも付いていて、下手なビジネスホテルよりも設備が良い。

ベッドと机、それから小さいテーブルを入れればくつろげるスペースも限られてくるのだが、部屋に入つて一番最初に思つたことは、和田美智子の部屋は整理されていて、手狭な感じを受けない清潔感のある部屋であると言う事だつた。

次に、芳香剤なのかそれとも香水からなのか、上品な柑橘系の香りが漂つていると言う事。

菊池は罪悪感を感じたが、調査のためだと、自らを奮起させて部屋の中へと足を踏み入れた。

さて、どうしたものか……

今まで色々な事をやつてきたが、この様に、他人の部屋で刑事の

真似事をした経験などはない。調査する手順も分からなければ、警察の様に証拠を分析する手段も持ち合わせていない。

菊池は部屋の入り口で立ち止まり、どこから手をつけて良いものか考えを巡らせた。

少し、事件の事を振り返つてみるか 菊池は今までに分かつている事を整理する事で調査の糸口を見つけられるかも知れないと、これまでの事を思い返してみた。

事件が起きたのは昨晩。理由は分からないが、何らかの原因によつて突然、和田美智子が騒ぎを起こした。国府田雅美が取り押さえのにだいぶ苦労したと言うのだから、彼女は相当混乱していたのに違いない。

薬物かとも思つたが、それは考えられなかつた。

事件の様子を聞く限り、和田美智子の抵抗は激しかつたという。薬の知識などは無いが、そんな激しい反応を見せる薬を使用したならば、美智子自身、薬を使った痕跡を消す余裕など無かつたハズである。

事件直後、国府田雅美を除けば誰もこの部屋に入つていない。

和田美智子を庇うために、国府田雅美が証拠を消したとも考えられないが、収容した友田病院では血液検査もしているハズで、嘘は遠からず判明する。

では何が原因なのか

和田美智子が病院に運ばれる際、着替えを持たせようと国府田雅美がこの部屋に入ったとき、彼女の部屋は窓が開いていた以外に変わった様子は無かつたと言つ。

それは本当の事だろう。現にこの部屋は良く整頓されていて、和田美智子のきれい好きな性格が伺えた。

では何が

菊池は部屋の中での、仁王立ちになりながら考えを巡らせていました。
「そうだな……やはり薬物の可能性は低いに違いない」 和田美智子の性格や状況から考えても確信を持てる。

しかしそれは、事件が最悪な方向に向かっているに過ぎない。
なぜなら、ますます暴漢の可能性が高くなるからである。

「一つ……確認しておくか」

菊池は最悪なシナリオが可能であるのかを確かめるべく、部屋の窓へと歩を進めた。

窓の庇である。

部屋の窓を開け、窓枠に手をつきながら身を乗り出してみる。
見れば、窓枠から足場となる下の庇までは1メートル程の高さあつたが、そこに降り立つ事は容易に出来そうに思えた。

庇の大きさは、窓よりも少し大きめに作られている。

窓は、比較的大きめに取られていて、横幅は2メートル程だろうか、庇の幅はそれよりも気持ち長い。そして、隣の部屋の庇までは、大体50センチ程度の空間が空いていた。

庇の出っ張りは約30センチ。人間が立つて歩くには十分なスペースに感じられる。耐重性に関しては何も問題がない。建設業者の問い合わせで、庇はコンクリート製で、十分な重さに耐えられる作りになつてている事を確認していた。

しかし……本当にここから犯人が逃げられたのであらうか？

菊池は改めて五階の窓から庇を眺めたが、半信半疑になつてしまつた。

確かに、高所で作業する人達は、命綱もそこそこに狭い空間だらうが自由に行き来している。とは言えこの様な庇を伝い、わざわざ

中央部に近い和田美智子の部屋まで行くものだろうか？

そうだ、もしその様な人間が居たとして、犯人は一体、どこから庇に飛び移つたのだろう？

考えられるのは、非常階段から庇に飛び移る事だが……菊池は窓から顔を出し、左側にある非常階段の方を確認した。

美智子の部屋はちょうど寮の中央部分に位置していて、非常階段からは結構な距離が見て取れる。

確かに、非常階段から庇を伝つてこの部屋に飛び移れない事も無いが……菊池はあらゆる可能性を考慮に入れようと考へた。しかし、一方でどうしても納得が出来ない事も事実だった。

どうして和田美智子の様な、一番中途半端な位置にある部屋に潜り込んだのだろうか？ もし襲つ覚悟で進入するならば、一番近い場所を選ぶハズではないか？

たまたま、和田美智子の部屋の窓に、鍵が掛かっていなかつたらなのだろうか……

いや、それにしてもやはり不可解である。

菊池はもう一度、庇を確かめてみた。

別に高所恐怖症と言う訳ではなかつたが、それでも、五階の窓から下を覗くと高さを感じる。人間が一番恐怖を感じるのは、これくらいの中途半端な高さだと聞いたことがあるが、それを実感できた。この高さの中、決して広いとは言えない庇の上を長距離移動できるのだろうか……自分だったら、隣の部屋に行くのが精一杯だろう。

菊池は素直な感想を持った。

するとその時、菊池の中で急速に一つの事が思い浮かんだ。

そうか、隣か！！

そう、隣の空き部屋の事であった。

そうか、もし犯人がいるならば、あの騒ぎをやり過ごす為には隣の部屋に隠れていれば良い。

あの場合、犯人がいると思う者はいなかつただろうが、もしそうなつたとしても、誰も空き部屋の事を調べはしなかつただろう。そして犯人は、騒ぎが収まつた頃を見計らい、悠々と部屋のドアから外に出れば良いのだ……

菊池はこれまでの疑問が、全て溶けきつてしまつたかのような興奮を憶えた。

思わず握りしめた拳に力が入る。

が、しかし、それは菊池や学園側が、一番考えたくない事であると気が付いて愕然とした。

もし、もしも犯人が、隣の部屋から出入りしたのだとしたのならば、それは学園内部の者としか考えられないではないか。しかも、教師や寮の管理人などの犯行だとしたら この考えに行き着いた瞬間、菊池は膝が震えて立つていても危うくなつた。

可能性から言えば薬やノイローゼなどよりも断然高い。

しかもそれが、教師や寮の管理人の犯行であるならば、佐久間学園の存亡に関わる一大事である。

そう、特殊な学園だけに命取りなのだ 菊池は事の重大さを感じずにはおれなかつた。

しかし一体誰が？

菊池は窓枠に手を付いてうなだれた。

すると、どこからともなく、誰かの視線が自分に向けられている気がした。

今は授業時間中で生徒は誰もいないはずである。しかも寮の窓は、学校の方向とは逆の、裏山の方へ向かつて取り付けられている。裏山には確か、小さな社が建つていると言つことだったが……菊池はもちろん行つたためしもないし、生徒達の中には、そんな建物があ

る」と自体知らない者が多い。

しかし菊池は、そんな山の方から視線を感じたのである。単に気のせいと言わればそれまでなのだが、どうにも気がなつて仕方がない。菊池はどうしても放つておく事が出来ず、しばらく視線の元を探していた。

すると　そこにある一人の男の姿を発見した。

アレは……宇賀神先生か？

遠田であることもあつて少々ハツキリしなかつたが、それでも菊池は、裏山に続くけもの道の様な所から、こちらに向かつて視線を向ける男を宇賀神勇(うがじんいさむ)だと確信する事ができた。

「嫌な者を見た……」

菊池は宇賀神の事が嫌いだつた。

一応「先生」と呼んではいたが、それは生徒の手前からであつて、本来ならば名前を呼ぶことすら遠慮したいと思つてゐる程である。それには色々と理由があるのだが、一番の原因是宇賀神の性格にあつた。

宇賀神の性格は暗い……いや、暗いだけならばまだ良いのだが、何を考えているのか分からぬと言つたタイプだつた。自分の意見を何も言わず、影で勝手にひねくれる性格なのだ　菊池は以前にあつた出来事を思い出していた。

その昔、ある期限までに提出してもらわなくてはならない書類があつたのだが、宇賀神の分だけがなかなか出て来なかつた。菊池は事務処理の為にその書類がどうしても必要だつたので、仕方なく宇賀神に書類の提出を促したのだが……それに対して彼は、理由なく逆恨みをしたのである。

もちろん宇賀神の方に非があるのは明らかである。

ところが彼には、自分が悪いと言つ感覺が全くないのか、提出を促しただけの菊池に、敵意の籠もつた視線を送るよつになつたのだ。それも、どこか異様な目つきなので、菊池は今思い出しても氣分が悪くなつた。

菊池の中に、あの時の異様な視線を送る宇賀神の姿が蘇つてきた……そして、それと同時に不安の炎で胸が押しつぶされそうな感覺に陥つた。

まさか奴が？

その考えに思い当たつた時、既に、宇賀神に対して先生と言つ敬称を使う氣も起きなかつた。菊池の中では、急速に宇賀神が犯人であると言う考えが固まつていたからである。

何事にも慎重をきする菊池であつたが、これだけは自分の直感を信じて良いと思つた程、その思いに迷いは無かつた。

いや、絶対に関係しているに違いない　教師なら部屋の鍵を複製する事も簡単に出来るし、たとえ寮内を歩いていたとしても、見回りと言えばどうとでもなる。

菊池の思考は宇賀神を犯人と仮定したとたん、ドンドンと回転して止まらなかつた。

手にはじつと汗をかいている。

そうだ、そうに違ひない　菊池は口にだして咳きながら、宇賀神のいる場所へと視線を戻した。

すると、もうそこには宇賀神の姿は無くなつていた。

消えた？

まるで手品のように姿を消した宇賀神に、菊池は得体の知れない

恐怖の様な感覚を憶えた。

まさか本当に消えてしまったのか？

そんな馬鹿な……いや、そんなハズはない、きっと考え方をして
いたから、奴がどこかに行つたことに気付かなかつただけだ。そう
に違ひない。

菊池は不安になる気持ちを抑えるために、そう思ひこむことにして
た。

そうだ、早急に隣の部屋を調査しなくては……

何事も即時に実行する菊池が、和田美智子の部屋を出たのはそれ
から10分も後の事だった。

つづく

其の四・見上げる

見上げる

「よつ雅美」

昼食後の休憩時間、国府田雅美は一人になりたくてわざわざ人気のない校舎裏へと逃れていたのだが、そこで、静寂とは無縁のあまり出会いたくない人物から声を掛けられてしまった。

「何よ貴弘」

顔を見なくとも声だけで分かつてしまつ。

学園で一番お氣楽な男……あまみやたかひろ雨富貴弘その人だつた。

「なんだよ、随分な反応だな」

「そうね、あんたのおちゃらけた顔を見たら、さらに憂鬱になつたわ……」

「な、なんですよ!」

雅美が精一杯の皮肉で迎えると、雨富は大げさに驚いてみせる。そう言つところがおちゃらけてゐるよ……と、雅美は言つてやりたくなつたが、今日はそんな言葉を口にするのもつゝといつしこ。代わりに、ジロリと淵みのある視線を向ける事にした。

雨富貴弘とは、佐久間学園に入学してからの付き合いだった。

とは言つても、恋仲などと言つた艶のある関係ではない。

入学式当日、クラスの女子全員に声を掛けていた雨富に、雅美も声を掛けられて以来の、単に仲のいいクラスメートと言つ位置づけである。

普通ならば、お氣楽な性格とひょうひょうとしてつかみ所の無い男などは、あまり近寄つて欲しくないタイプなのだが、不思議と雨富に関して言えば、なにかと氣があつて他の男子生徒よりも気楽に

話せる仲になつていった。

雨宮は、どこか由緒ある神社の跡取りだと聞いた事があるのだが、言われてみれば、そう、どこか坊ちゃん坊ちゃんしたところも見受けられる。

一度雅美は、雨宮にその事を聞いた事があつたのだが、結局本人がはぐらかすのみで、眞偽の程は分からず仕舞いだつた。とにかく、どこか憎めないいたずらっ子の雰囲気の雨宮と、なぜかは判らないが馬があつて、本当に軽口を言い合ひうような、そんな気軽な関係であつた。

しかし、今の雅美に取つては、そんな雨宮の相手をしているだけの余裕が無かつた。

そう、昨夜の事で頭がいっぱいだつたからである。

「悪いんだけど、用事が無いなら一人にしておいてもらえない」と、雅美は单刀直入に用件だけを伝えた。

かなり乱暴な言い方だつたが、雨宮がこれしきの言葉で気分を害する様な男でない事を知つてゐる。それに雅美自身、江戸っ子の祖父の影響からか、遠回しなやり方はあまり好みでは無い。

そして雨宮の方も、そんな雅美の性格を良く飲み込んでいた。

「お前が珍しく悩んでるみたいだから、からかいに来てやつたんだけどな。やつぱり美智子の事か？」

「あんたも興味本位の口？」

雅美はやりきれない気持ちでため息をついた。

今日は、朝から同じ質問を繰り返されていたからである。

和田美智子がどうかしたつて本当?

和田がおかしくなつたつて?

美智子が何者かに……

確かに、全寮制という環境の中でこれ程の事件があれば興味を引

かない方がおかしいだろ？でもだからと書いて、自分のクラスメートを興味本位だけで話のネタにするのはどうしても許せない雅美は無責任な噂を流したり、興味本位な質問ばかりしてくるクラスマートが多い事を思い出すと、自然と憂鬱な気持ちになつたり、憤りを感じずにはおれなかつた。

良くTVなどで、芸能人などのスキャンダルを放送しているが、雅美にとつて、あの手のモノが一番不愉快だつた。人が人の不幸やプライベートをのぞき見て、訳知り顔で道徳や倫理を振りかざしたり、無責任な批判や同情を寄せるなど、これ程愚かな行為は無い

と、思うからである。

しかし雅美は、今回のことでいかに他人が他人の不幸に関して無責任な興味を抱くのかを知つた。

確かに、本気で美智子の事を心配する者も多かつたのだが、それと同じくらいに、興味本位な者が多かつたからである。

露骨に麻薬やノイローゼだと言い出す者もいて、雅美はそれらの無責任で無遠慮な者達に、やりきれなさで一杯になつっていたのである。

「美智子の事、興味本位で話題にするなら、いくらあんただつて許さないからね」

と、雅美の口調がキツくなるのも無理はない。

しかし雨宮は、そんな雅美の態度にも平然とした顔でこう続けた。「うーん、そうだなあ、興味が無いと言つと嘘になるけど……」「なー！」雅美は雨宮を睨みつけた。

「貴弘、あんた見損なつたわ。あんた、普段はおちやらけてるけど、こつ言つときだけは真面目に考へると思つていたのに」

「おいおい待てよ。オレがいつ、興味本位だけで美智子の事を聞いたよ」

と、雨宮は雅美の鋭い視線に出会つて苦笑した。

「彼女の事はキチンと心配しているさ……ただ、どうして美智子が

あんな事件を起こしたのか、それには興味があるのさ」「それのどこが違うのよ。無責任で興味本位な奴らと変わらないじゃない」

「オレの言つてる意味が判らないのか?」

雨宮はそんな雅美の視線に、困った顔を作った。

「オレは噂になっているように、美智子が麻薬に手を出すような娘じゃない事を知っている。それに悩み事があつてノイローゼになるような人間じゃないこともな」

「そうよ、美智子があんな騒ぎを起こしたのは、そんな理由からじや無いわ」

「そうだ、美智子が麻薬やノイローゼなんかでは無いことは、この男に言われなくとも私が一番良く理解している。美智子はそんな事に逃げ込むほど、弱い人間ではないのだ。」

「じゃあ一体、その理由つて何なんだ?」

雨宮は、この男にしては珍しく真面目な顔をしていた。

「もし、その理由を作った人間がいるとしたら

「理由、を……作った人間?」

「そうだ、犯人と言つても良い。そんな存在がいるとしたら」

犯人がいる。

雅美はその言葉に大きな衝撃を受けた。

「もし犯人がいるとしたら……」

「俺達はどうするべきなのか、だな」

雅美は無意識に避けていた考えを見つめ直した。

そうなのだ、美智子が麻薬やノイローゼではないとしたら、あれほど取り乱す理由はなんだつたのだろうか。それはやはり、誰かに襲われたとしか……

「でも、あの時は誰もいなかつたわ。私は事件の直後、美智子の部屋に入つたのよ。無人だつた」

と、雅美は昨夜の状況を振り返つてみた。

「少なくとも、私が騒ぎに気が付いてからは、誰も見ていないわ」「じゃあ、一体どうしたって言つんだ？ 麻薬やノイローゼじや無い」としたら、どんな理由があつたんだ」「そ、そんなの判らないわよ……そんな事

「確かに、俺達がどうこうする問題じゃないかも知れない。だけど、俺達にも何か出来る事があるんじゃないのか？」

雨富は雅美を見つめながら「少なくとも、友達として何かをしたいとオレは思う」と、続けるのであつた。

「私たちに出来る事……」

そうだ、私は美智子の為に何かが出来るはずだ。周りがどう思おうと、自分だけは美智子の事を信じてあげよう。そして、もし犯人がいるならば 雅美は心の中にかかっていた霧が、一気に晴れて行く様な気がした。

そして雨富を、少し見直す事にした。いつもはへらへらとしていて、調子の良い男と言つ印象なのだが、今見せる真剣な眼差しには胸の高鳴りさえ感じる。

何より、美智子の事を友達として心配し、そしてその友達の為に何かをしようと言つ姿勢は、格好良く写つた。

「な、なによ、意外と格好いい事言つじゃない。あんたのそつ言つ部分、良いと思つよ……」

「ん？ 俺に惚れたか」

「そう言つ部分は嫌いだけどね

と言つて、雅美は笑つた。

「でも、そうよね、私たちにも出来る」と、あるばずよね……と、雅美は自信に言い聞かせるよつて言つた

「おつ、おつ、おつ……」

と、雨富はそれに答えた。

そつか、貴弘はもう、事件に関して何か考えている事があるのね

「それで貴弘、私たちには何が出来ると思つ?」

「むつ、そりや……色々に決まつてゐるじゃないか」

「色々つて?」

「そりや色々だよ……」

「貴弘……何か考えがあつて言つたんじやないの?」

アレだけキッパリと言い放つた割に、無計画なんじやない?

雅美は信じられないと言つた顔を向けた。

「そ、そんな顔しなくたつて良いじやないか。オレはあの事件の事、なんにも知識が無いんだぞ、対応のしようがないだろ」

と、雨宮は頭をかいた。

「だから、雅美の知つている事を聞きに来たんじやないか

「ははは……ま、この方が貴弘らしいか

と、雅美は気兼ねなく笑つた。

「……と、ここまでが事件のあらましよ」

昨夜の事を、雅美はなるべく順序立てて話したつもりだった。今朝一度、事務員の菊池に話していたので、説明は良くまとまるはずである。

「聞いた限りじや、殆ど事件に関係するようなことは判らないな」

「そうね。私が騒ぎに気が付いた時は既に美智子は廊下にいたし、その前の事は全く判らない状態だつた。ただ……」

「部屋の窓か?」

「うん。だつて今の季節、昼間は結構暖かくなるけど、まだまだ朝夕の冷え込みは厳しいでしょ? 貴弘も知つてるとおり昨日の夜も冷え込みが激しかつたじやない。空気の入れ換えをするにしても開けっ放しになつっていたのはちょっと不思議な気がするの」

「いや、確かに雅美的言つとおりかもしれない」

「貴弘もそう思う？」

「まあ、何も無いと言われば反論出来ないけど、やっぱり疑問に思つ事は確かだな。寮の中は殆ど集中管理の空調が利いていて空気の入れ換えなんて殆どしない。少なくとも、オレは昼間の内は窓を開けることがあっても、夜にはあまりしないな」

と、雨宮は腕を組んだ。

「そのほかには、美智子の部屋に手がかりになるような事は無かつたのか？」

雨宮に言われ、雅美は記憶の糸を探つた。

「あの時は結構焦つてたし、着替えを取りに入つただけだったからね……でも、見た感じではいつも美智子らしい部屋だつたわ」

美智子はきれい好きだからね

雅美は奇麗に整頓された部屋

の様子を思い出した。雅美もどちらかと言えばきれい好きの方だったが、美智子の部屋を見ると、いつも叶わないと思つてしまつ。

雅美の部屋は表面上奇麗になつてゐるもの、クローゼットを開ければると困つたことになるのだが、美智子に関して言えばそれも無い。見えない所でも、キッチンと整理されているのである。

「うん、やっぱり変わつたことは無かつたと思つ」

雅美はどう思い返しても、窓が開いていた以外、変わつた点を見つけることが出来なかつた。

「すると、やっぱり窓が開いていたことが関係しているのかもしけない」

「でも、それってどういう事……まさか本当に人が出入りしたって訳じやないでしょ？ 美智子の部屋は五階の、しかも建物のほぼ中央あたりにあるのよ」

多少、高所恐怖症の毛がある雅美には、五階と言つ高さで人が窓の外を歩くなど想像出来なかつた。

「それは判らないけどな……高い場所での工事を専門にしている人

にしてみれば、五階なんて高さは気にならないかも知れない。それに、雅美だつて窓の所にコンクリート製の庇がついているの知つてるだろ？ アレだつたら、人が歩くのも不可能じやない

「じゃあ、美智子は誰かに襲われかけた？」

と言つて、雅美は不安になつた。

「何とも言えないが、その可能性が無いとは言いきれない」

雨富は難しい顔で呟くと、ふらりと歩き出した。

「ちよつと、どこ行くのよ」

雅美も雨富につられて歩き出す。

「いや、何となく美智子の部屋を見に行ひうと思つただけど」「そんなの無理に決まってるぢやない。いくら一階まで繋がつているからつて、女子棟に男のあんたが入つていける分けないぢやない。禁止されてるのよ…… それに、今は美智子の部屋には鍵が掛かっているし」

「何言つてんだよ雅美。お前まさか本当に女子棟に男が出入りしないとしても思つてんのか？」

「だ、だつて、女子棟へ来るには一階の先生達の部屋の前を通らなくちゃ来られないぢやない」

「お前なあ……」

本当にか？ と、雨富は雅美の顔をのぞき込んだ。

「な、何よ、何でそんな顔するのよ」

「いや、なんでもない……雅美が意外な事を言つからな」と、雨富は小さく笑つた。

「ちよつと、その笑いは何よ！」

人を小馬鹿にして！ 雅美はにやけた顔をしている雨富の向

こうづねを、思いつきり蹴飛ばしてやつた。

「痛つて――！」

「ふんだ！人様を笑う者には、神様の罰が当たるのよ」

痛がる雨宮に、雅美はそっぽを向いた。

「つて、神様の罰じゃ無くて、お前の足が当たったんだろうが！」

なんとでも言つてなさい　抗議の声を上げる雨宮に、雅美は知らぬ顔を決め込んだ。

「それよりもさつき言つた事、どういう意味なのよ。あなたは誰にも見つからず、女子棟へあがれるつて訳？それに、さつきも言ったとおり美智子の部屋には鍵が掛かってるのよ」

やつと痛みがひいて歩みを再開した雨宮は、「女子棟へ行くのは簡単なんだぜ」と、自信たっぷりにうなずいた。

「まず女子棟だけどな、あれは、非常階段を登れば誰にも見つからず、中へ入れる」

「でも、非常口には内側から鍵が……」

「まだ分かんねーの？」

と、雨宮は困った顔になつた。

「なによ、もう一回蹴飛ばして欲しいわけ？」

「だからさ、その内側の鍵を、中の人間が開けたとしたらどうするんだよ」

何を分かり切つたことを　　そう言いたげな口調だつた。「つ

まり、彼女の部屋で『休憩』って言つ奴らが、時間を決めて鍵を開けるんだよ」

「あ　　」

雅美はここまで聞かされて、ようやく理解することが出来た。

そ、そういうこと……ね

「で、でも、美智子の部屋の鍵は『じつする』のよ、鍵は」

「開かない鍵は無いんだぜ」

「まさか、あんたが開けられるとでも言つの？」

「いや、まあ……開けられない事も無いけど、今はそれをやつてる時間は無いな」

と、時計を見ながら言つた。後少しで午後の授業が始まる時間だ

つたのである。

「も～、分かんないわね。じゃ、一体何しに寮に行くのよ。しかもこのまま行けば寮の裏側に出ちゃうじゃない」

「何でって、だから美智子の部屋を見にな」

「だつて今、それをやつてる時間は無いって言つたでしょ」と、雅美は、矛盾した話に行動が読めなかつた。

「ああ、部屋の中に行くんじゃ無くて、外から確認をしにな」

「外？」

「そうだよ。どれくらい高さがあるのか、それに人が庇の上を歩く事が出来るのか」

なんだ、そう言つ事か 解つてしまえば簡単な話である。雨富は、美智子の部屋を、外から確認しようと/or>ていたのだ。

「それならそつと、最初から言いなさいよ」

「最初からつて、お前が早とちりするから悪いんぢゃないか」

「あんたが、キッチンと説明しないのが悪いのよ」

二人の間には、しばし、たわいのないやり取りが続いたが、それもすぐに終わりを告げた。目指す場所へと到着していたからである。

「ここが、美智子の部屋の真下か……」

雅美と雨富の一人は、遙か五階にある美智子の部屋を見上げてみた。

寮は建ててからそう年月が経つていないので、まだまだ奇麗な色をしている。部屋の窓は裏山の方へ面していて、寮全体を見ると結構な大きさだつた。

一階が食堂などの大きな施設になつており、二階が教職員用の部屋。そして三階から上が生徒達の部屋になつてているのだが、新宿都府の様に建物が二つに分かれていて、それぞれの棟へは二階を通らなければ行き来できない造りになつていた。

和田美智子の部屋は、女子棟のほぼ中央に位置していて、向かつ

て右側の部屋が空室になつており、さうにその右隣が雅美の部屋であつた。

「確かに、人間が庇の上を歩くのも、無理じゃないな……」
と、雨宮は庇を確かめて言つた。

「でも、本当に美智子の部屋に、誰かが進入したのかしら?」

「さあな……」

「『さあな』って、もう少し真面目に」

と、雅美は言葉を切つた。一人が立つてゐる場所は、それ程の高さは無いものの、一面に雑草が生えていて地面が見えない。

雨宮が、しきりにその雑草を足でどけて地面を眺めていたからである。

「何やつてんの?」

美智子の部屋を見てみたいと言つていたのに、今度は地面を眺めているなんて 雅美には、雨宮の行動が理解できなかつた。

「ねえ、何やつてんのよ……」

「いいから、雅美も何かを探してくれよ」

と、雨宮は理由も言わずに、雑草を足でかき分けていた。

「何かつて、何よ?」

「だからさ、ここに何かが落ちてないかだよ。もし犯人が庇の上を歩いていたのなら、何か手がかりになるようなモノでも……」
不意に雨宮の動きが止まつた。

「ほら、見ろよ」

雨宮は、地面に半ば埋まつていた小さな銀色の固まりを、拾い上げていた。

「それって……何?」

「ライターだよ」

「びりついた泥を落としながら」「コレは自分でオイルを補充する

タイプのライターで、強風の中でも火がつくって言つ奴さ」

「それで、そのライターがどうしたって言つのよ」

得意顔でライターを見せる雨宮に、雅美はそれで?と、気のない表情で聞いていた。

「はあ? なに言つてんだよお前。コレがどうしてこんな所に落ちてると思つてるんだ? これは、間違いなく犯人のモノだよ」

「しょうがないな」と、雨宮は困った様な表情で雅美を見た。

「だつて、ライターなんてどこでも売つてるじゃない。それにどうして「コレが犯人のモノだと言えるのよ……」

「何がなんだか解らない 雅美は雨宮の説明を待つことにした。「あのなあ……じゃあ、どうしてこんな所にライターが落ちてるんだ?」

「どうしてって、そんなの誰かが落としたに決まつてるじゃない」「で、どこから落としたんだ?」このライターは半分地面にめり込んでたんだぞ」

「そんなの、少し高い所から……」

ハツ

「じゃ、それ、五階から落ちた」

「それ以外考えられないだろう。ライターが地面に埋まるつて言つのは、結構な高さから落とさなければならぬ。そう、ちょうど美智子の部屋がある五階くらいの高さか……寮にはライターの持ち込みが禁止されてるの知つてるよな?」

「当たり前でしょ」

「まあ確かに、煙草を吸つてる奴らがそれをバカ正直に守つてると思えないがな。でも……」

「美智子は煙草なんて吸わないわ

「だろう。じゃあどうしてライターが落ちているのか？それはライターを持つていた人間がいたからだ」

「じゃあ、本当にそのライターは犯人が落としたモノ？」 雅美は、漸く雨宮の結論に達すると、同時に複雑な感情に支配された。誰かが部屋に進入し、そして美智子に対して何かを……悪い想像ばかりが浮かんでくるのがたまらなく嫌だった。

けれども……貴弘の言っている事、あながち嘘とは思えない。いいえ、かなり信憑性のある事だと思える。

雅美はこの時点で、美智子の部屋に『誰か』が、進入した事を認めたわけには行かなかった。

ただ、犯人がなぜ、この様なライターを落として行ったのか？ その事がのどに引っかかった小骨の様に……雅美の心にしこりとして残るのである。

雅美はもう一度、美智子の部屋へと視線を戻そうとした。と、その時

「あら？」

部屋の中で、何かが動くのを見た気がした。

「どうした」

と、雨宮もその声につられて上を見上げる。

「なんかあつたのか？」

しかしそこには、声を上げるほどのモノは見つけられなかつた。

「うん……今、部屋の中で何かが動いたように感じられたの。だけど

」

雅美が見上げた部屋は、美智子と雅美の部屋の間にある空き部屋の方だつた。

見間違ひね 雅美がその事に気が付いて、雨宮に言おうとしたときだつた。

「何をしていいんだい」

二人は不意に、背後から声を掛けられた。

つづく

其の五：人影

人影

「何を……しているんだい」「

寮の裏手、山側に面している側は普段から人影の少ない場所であった。

それもそのはず、あまり日があたらない割りには下草が脛のあたりまで伸びていて、歩くには煩わしい。それに、学園内で裏手通り抜けで行く場所は全く無い状況であるからだ。

それから、この場所は部屋から一望でき、秘密」とに向かない事も理由の一つであった。

現在、雨宮と雅美がいるものの、美智子の事が無ければ、一人も裏手には無用の人間であった。

よつて、このような場所で不意に声を掛けられれば、雨宮達で無くとも大いに驚くに違いない。

まして二人は話に集中していたので、突然の来訪者に驚きもひとしおなモノになつた。

「君は国府田君と……雨宮君だったね」

その人物は、決して少なくない生徒の、顔と名前を全て暗記している様だった。

「き、菊池さん！？」

雅美が声の方へ振り返ると、そこには菊池の姿があつた。

雨宮も、突然声を掛けられた事に驚いたが、それ以上に自分の顔と名前が一致している菊池の記憶力に驚かされた。

たしか雨宮自身の記憶では、菊池と話をしたことは数回しか無かつたはずである。

「き、菊池さん……どうしてここへ？」

「ん? どうして?」

菊池は和田美智子の部屋から、この裏手に宇賀神らしき姿を見かけ、それを確かめに来たのだが、そこでちよづじ、雅美と雨宮の二人を見かけたのである。

「君たちこそ、こんな場所で何をしていたんだい? 愛の語らいをするには、少々雰囲気に欠けると思うけどな……」

菊池は冗談の様に言つていたが、視線は鋭くこちら側の表情を窺つてゐる と、雨宮にはそう思えてならなかつた。

「僕に見られたら、まずい事でもしてたのかな?」

「な!? 私たちは、そんなんじや

「いやあ~分かりますか菊池さん。他の奴らには内緒ですよ」

「ちょ、貴弘、なに言つて……」

「あはは、雅美、照れるなよ」

動搖する雅美の言葉を封じる為に、雨宮はいつものおしゃらけたキャラクターを演じる事にした。これだけのやり取りだったが、雨宮には、どこか菊池の事を油断のならない人であると感じたからである。

菊池は俺たちが過敏に動搖したのを見て、何かしらの事情があると思ったに違いない……眞面目が服を着ていると言つ噂の菊池が、わざとからかう様な言葉を掛けたのは、動搖している俺たちにカマを掛けようとしたのだ。

現に雅美など、思いつきり否定してそのままここに居る本当の理由を言いそうになつたくらいだ。菊池の言葉が意識して出たものなら、人の行動を良く理解しているのか、それとも雅美の性格を把握しているのかどちらかだ。

あれだけの一瞬の間で、これだけの思考とカマを掛けて来る菊池の、頭の回転の早さは驚きに値する。

それとは別に 雨宮には気になることがあった。

どうして寮の裏手に居ただけの俺たちに、さりげなくではあったが、カマをかけて来たのか？

菊池はどうしてこの場所に来たのか……何か理由でもあるのだろうか？

雨宮の頭の中に、疑問符が浮かんだ。

「俺たちの事は秘密ですよ菊池さん。それよりも、菊池さんはどうしてこんなところへ？何か用事でもあつたんですか？」

「いやなに、僕は事務とは言つても、学園の建物の管理とかもやらされているのでね、たまに校舎を一回りしては、色々見回ってるんだよ」

貴弘の質問に、菊池はよどみない答えを返すかに見えたが、一瞬、誰かの視線を感じ取つたのか、山の方へと視線を向けた。

ん？

その視線に気が付いた雨宮は、しかし、その視線の先を追わない様にした。気にはなつたが、菊池の表情を窺つ事に集中したのである。

「さてと……僕はお邪魔みたいだから、そろそろ退散をせてもらうよ

「そんなんじゃ無いんです！菊池さん誤解しないで下わー」

「なんだよ雅美、俺は本気なんだぜ」

「あんたは黙つて！」

「あはは、ういらやましいね、君たちみたいな関係は」

菊池は本当にういらやましいと言つた顔で笑つたが、それはどこか、よそよそしかつた。

そう、先ほど一瞬だけ視線を逸らした時から、何かしらの事に気が取られている様なのだ。

「それじゃ本当に、僕は失礼させてもらひつよ……君たちも、もひち
ろそろ次ぎの授業が始まる頃だらうから、早々に教室に戻らないと
ね」

「分かりましたよ菊池さん。それじゃ行こひぜ雅美」

雨宮はこれ以上雅美が何か言い出さないように退散しようと思つ
た。

何故かこの菊池にあまり事件の事を話してはいけない気がしたか
らである。

ところが、雅美はどうしても美智子の事が気になるのか、菊池に
彼女の容態を訊ねていた。

「あの菊池さん、美智子の……」

!!!

雅美が和田美智子の名前を口にすると、一瞬、菊池はポーカーチ
エイスのその顔に、動搖の色を見せた。

「美智子の様子はどうなんでしょうか。意識は、あの、戻ったんで
すか？」

「ん、ああ、朝にも話したと思つけど、彼女に外的な傷害の痕は無
かつたし、友田医院は信頼できる病院だ、きっと今頃には意識も戻
つていると思うよ」

それだけ言うと菊池は「それじゃ本当に用事があるから」と言つ
てその場を逃げるよつに立ち去るのであつた。

どうした事だらう？何故菊池は、あの時視線を逸らしてから冷静
さを失つたのだろうか……

貴弘は菊池が遠ざかるのを待つてから、菊池が視線を逸らした方
向へと視線を向けた。

しかしそこには、いつもと変わらぬ鬱陶しい程の森が広がつてい
るばかりで、菊池が動搖する程のモノは見つけられなかつた。

「……ねえ」

「一体そこに、何があつたんだろう。

「貴弘」

いや、「誰」かも知れない。

「ちょっと貴弘！」

「つて、なんだよ雅美、さつきから」「何よ貴弘、何度も呼んでるのにもつともらしい顔で考え」として。それにして菊池さんに誤解される様な事言つたのよ……」

雅美の類が、これ以上ないと言つた程に膨らんでいた。

「それから、どうして菊池さんにライターの事を黙つていたの。アレが本当に犯人のモノだったら、やっぱり学校側に知らせた方が良いんじゃない？」

「ん? どうして……」

と、貴弘は少し考えてから。

「まあ、理由としてはいくつかあるけど、まず一つ目として、ライターを落としたのが菊池さん自身だったなら?」と、逆に問い合わせた。「だ、だって、菊池さんは事件とは関係ないじゃない。逆に事件の事を調査してるのって、菊池さんなのよ……」

「だからって、菊池さんが犯人じゃないって保証はどこにもないだろ」

「じゃあ貴弘は、菊池さんを疑つているの?」

と、雅美は信じられないと言つた顔で訊いた。

すると貴弘は、「いいや」と、平然とした顔で首を振つてみせた。

「全くそんな事は思つてない」

「な、何よそれ……自分で言つておきながら、勝手に否定しないでよ」

「まあ、何となく つて言つ部分もあるけど、せつかく俺達が見つけた手がかりだ」

貴弘はここまで言つと、この男には珍しく真剣な顔つきになつた。

「それに、絶対に菊池さんが犯人じゃないとは言えないだろ」

「もう、貴弘は一体、菊池さんの事を犯人だと思つてゐる訳?思つてない訳?」

雅美は江戸っ子の血か、单刀直入な答えを要求する。

「可能性の問題さ。たぶん、菊池さんは犯人じゃ無いだろ?。でも、菊池さんは学園側の人間であつて、生徒側の人間じゃない」

「ま、また訳の分からぬ事言つて……貴弘は何を考えてるのよ!」

「」

雅美の頬が、膨らんだ上に紅潮してきた。

「もしも犯人が見つかつた時、学園側に不利になる人物だとしたらどうなる?」

え!?

「犯人が見つかることによつて、学園側にものすごく不利になるとしたら、名門の名が高いうちの人間は、必死になつて犯人を隠して闇から闇……ねんて事もあり得無い」

「だつて、そんな事」

「無いとは言えないぜ。俺が経営者としても、犯人を警察に突き出すなんて事はしないだろう。もつとも、一度とこの学園には居られないばかりか、教育者としての道も閉ざす事はするけどな」

雅美はいつもはちやらちやらしている兩宮の口から、予想しなかつた程のキツイ言葉が出たことに息をのんだが、次ぎには、本気で怒つている表情で

「そんなの……許される事じゃない」と、憤りの言葉をはいた。

そんな雅美を見て貴弘は

「犯人を俺達が見つけるつて言つのはどうだ?」と、やはり真剣な顔つきで言つた。

「犯人を……私たちが?」

「そうさ、美智子を入院させた奴を捕まえるのぞ」
と言つて貴弘は、雅美を真つ直ぐ見つめ返す。

「美智子は俺達の友達だよな……確かに、菊池さんと協力した方が犯人を捕まえやすくなると思うが、俺達がこんな事を調べていると知つたら、学園側はそれを辞めさせるだろ?」

「やっぱり学園の名譽の為?」

「そうさ、俺達がこの事件を調べるのは学園に取つてはあまり歓迎できる事じやないからな……だけど

と、雨宮は何かを決意した様な表情になつた。

「だけど、友達としてそれは許せないだろ。美智子が犯人に対してどうするかは解らないけど、俺達は、犯人を見つけておく必要があると思つ」

「貴弘……あんた本気で美智子の為に犯人を捕まえようと思つてるの?」

普段の雨宮から想像も出来ない言葉を聞いて、雅美は意外と男らしいと思つた。

それに、ライターを見つけたのも貴弘の行動があつたからである。学校の成績は対して変わらないけれど、案外こう言った分野では実力を発揮するタイプなのかも知れない

「ねえ、本当に私たちだけで犯人が捕まえられると思つ?」

「それは解らないけど、俺達だからこそ出来る事もあると思つてる。それをやるしかないな」

「そうよね、私たちに出来る事を……」

どうしたんだろう、今までこんなに貴弘の事を頼もしく思えた事なんて無かつたのに 雅美は雨宮を前にして鼓動が高まるのを、否定する事が出来なかつた。

「ね、貴弘

と、雅美が言いかけると、今度は貴弘の質問に遮られた。

「そう言えば雅美、さつき何か言いかけたけど、あれは何だつたん

だ？」

「え？」

「さつき、上を見上げたときに、何か言いかけただろ？」

「ああ、あれね……」

雨宮の急な問いに困惑したが、あの時言いかけたことを思い出出した。

「あの時……菊池さんが現れる前に、私は美智子の部屋をもう一度見ようとしたの、その時なんだけど、どうも美智子の部屋に人が居たように見えたのよ……でも、おかしいなと思って」

「そりやおかしいよな。美智子の部屋は今、鍵がかかって誰も入れないんだろう？」

「あ、おかしいって言つのはそつじゃないの」

ん？　　“いついついつ事

貴弘は雅美の言葉に首を傾げた。

「あのね、私が人影を見たって言つのは、美智子と私の部屋の間つまり……今は誰も使っていない空き部屋だったの」

と言つて、雅美はあの時の事をハッキリと思い出した。

そう、そつなのだ、やっぱり私は、あの空き部屋の中で誰かが動くのを見た気がする　　雅美は、見た直後には自分の見間違いかと思つたが、良く思い出してみれば、やっぱり見た気がしてきた。

「うん、やっぱりあの空き部屋だつたわ」と、雅美は言い切つた。

「人影つて……だつて、今は誰も使つてない空き部屋なんだろ？」

「うん、だけど、やっぱり間違ひ無いわ。だつてあの時　　」

雅美は立ち止まり、顎に手をあてながら自分の記憶をたどつた。

「あの時、備え付けのカーテンが、揺れるのを見たんだもの……そ

う、カーテンの影に誰か居たんだわ」

「それは本当なんだな」

雨宮は、真剣な顔つきだった。

「なによ貴弘。私がこんな事で嘘を言つたって、仕方が無いじゃない」

と、雅美は念を押されて反発した。

「もしも……」

「もしも？」

「美智子の部屋に進入した犯人が、空き部屋を利用したとしたら？」

「え？」

二人の動きが一瞬凍り付いた。

「確かめに行くか？」

と、先に声を出したのは雨宮だつた。

「確かめに行くつて、あの空き部屋へ？」

「そうだよ、あの空き部屋に誰かが居たとしたら、そいつが犯人と言つ確立が高いんだぜ」

雨宮は少し興奮した面もちで言つた。

「だ、だけど、今調べに行つても、もう居ないかも知れないわよ？」
と、雅美が言つた時、午後の授業の始まりを知らせる予鈴が鳴り響いた。

ちえつ

それを聞いた雨宮は、舌打ちした。

「ねえ……どうするの？」

雅美の顔に、困惑の表情が浮かぶ。

「今は無理だとしても……」貴弘は残念と思つ反面

「オレはあの空き部屋を調べてみるよ」

雨宮貴弘は、犯人を捕まえる為の大きな手がかりを得た気がした。

வாரு

其の六・きっかけ

きっかけ

佐久間学園の寮は5階建ての近代的な建物であったが、エレベーターは設置されていなかった。家具などの大きな物は、屋上に設置されている小型クレーンを使って運び入れるようになっていたし、何より、生活に必要な物は備え付けになっている事が多く、クレンジング 자체あまり使っていない状態だから、必要が無いと言えなくもない。

それに、エレベーターなどは定期点検などで意外と費用が掛かる。いくら寄付金などが集まりやすい私立の名門とは言え、無尽蔵にお金が使える訳ではない。

細かい事かも知れないが、それらの理由から設置しなかつたのである。

五階建ての寮は、一階までは共同施設などで一緒の建物になつていたが、三階から上は、ちょうど新宿都庁の様に男女別々の棟に分かれていて、二階からそれぞれの塔に移動する。

三階は三年生の個室、四階は一年生。そして最上階の五階が一年生の部屋となつているのだが、エレベーターが無いので意外と上り下りがきつい。

そして、中の階段とは別に、建物の外には非常階段が設置されていた。頑丈な造りで、震災などに備えて各階の踊り場は十分な広さが確保されている。

その踊り場へは内側から鍵を開けて出るのだが、地震などの場合、非常扉が変形して開かなくなるケースが多いらしく、その対策として、一番端の部屋から、頑丈な庇を伝つて踊り場に出られる様にな

つていた。

「しかし……」

今回の事件では、それが仇となつた。

赤岡自身、寮の設計段階では非常時の事を第一に考え、庇の事や踊り場を広めに取ることに賛成していたのだが、まさかこんな事に使われるとは思つても見なかつた。

もつとも、未だ真相が分かつた訳ではないので、非常階段や庇が使われたとは断定出来ないのだが、菊池の話を聞く限り、それを否定することは出来なかつた。

「しかし……」

赤岡は一度目ため息をついた。

菊池に事件の調査を依頼したものの、赤岡には、どうにも最初から嫌な予感がつきまとつていた。無論、この様な事件が起きるだけで相当な問題なのだが、事件の真相は最悪の方向へ向かつているのではないか……赤岡はそう思えてならないのである。

事件の内容や佐久間学園の地理的状況、その他諸々の条件を加味すれば、自ずと犯人の範囲が絞られてくるのだが……どうしても内部の人間が関係していると言わざるを得なかつた。

そしてそれは、生徒側の人間ではなく、恐らくは教師や職員と言つた、学園側である可能性が高いのである。

自分が理事に就任してからというものの、『問題と言える問題』はついぞ出てこなかつたのだが、ここに来て、自らの進退を決する程の『事件』が起きたのは、まさに青天の霹靂と言つほかは無い。

赤岡は革張りの椅子に、深く身を沈めてため息をついた。すると、不意にドアをノックする音が部屋の中に響いた。

力チャ

マスターキーを差し込むと、乾いた金属音と共に鍵が開いた。

場所は和田美智子の部屋の隣。今は誰も使用していない空き部屋の前に菊池は来ていた。

もちろん、あの事件を調べる為である。

女子棟のほぼ中央に位置する和田美智子の部屋に、決して狭くない庇を伝つて行くには、空き部屋である隣の部屋を利用したに違いない。

菊池はあまり勘に頼る事は無かつたが、今回に関しては確信に近いモノを感じていた。

冷静になれ　　と、菊池は自らに言い聞かせようとすると、だが、マスターキーを差し込む時、微かに手がこわばるのが分かつた。

「冷静に判断しなくては」

菊池は何度と無く自分に言い聞かせようと試みた。が、しかし、裏山へと続く道に宇賀神の姿を見てからと詎うモノ、その思考はまるで意味をなさなかつた。

偏見を持つて事件を調べれば、正常な判断が出来なくなると、心の中では分かつていいものの、宇賀神の、そうあの暗く濁つた様な瞳を思い出すと、菊池はどうしてもある考えに支配される。宇賀神勇による犯行なのではないか　　と言つ一つの結論に。

「ふう……たかだか空き部屋を調べるだけではないか」

人は声に出して言葉を発すると幾分落ち着く事が出来ると言つが、菊池はそれを実行していた。

あの事件のあと、多少ではあるが証拠を消す為の時間はあつたはずで、犯人がもしこの部屋を使つたとしても、証拠が残つてゐる訳ではない。

ただ……この部屋は随分と使用された事がなかつたので、もし人が使用したならば、その痕跡は分かるハズである。

今回この部屋を調べるのは、単に利用されたかされなかつたかの確認だけだ　　菊池は何とか自分を納得させると、ドアノブへと手を掛けた。

冷静になれ

もう一度心の中でつぶやくと、菊池は思いきりそのドアを開けた。

瞬間！菊池の脳裏は強烈な印象によつて……思考の全てを支配された。

紅い……瞳

コンコン

「菊池です。学長いらっしゃいますか？」

どうやら、ノックの主は菊池らしかつた。

「入りましたえ」

何か進展でもあつたのであらつか？

菊池は実に優秀な男だ。この学園で事務の全般を任せているのだが、やる事全てにそつがない。確かに、事務処理能力に秀でた者は

どこにでもいる。

ただ、菊池はそれだけの男ではなかつた。若いのに、感心するほど細かい部分へと気が回る男なのだ。

例えば、生徒達の中には各界の有力者を親に持つ者がいるのだが、慶弔事があればそつなく挨拶状などの手配を行うし、私自身が出席しなければならない程ならば、式場への経路まで調べてくる。

今回の事にしてもそうだつた。

和田美智子の入院先や家族への連絡など、その対応の全てに気が利いていて、任せっていて安心感がある。

少々事務の領域を越えてはいるが、今では秘書の様な位置づけで考へている程だつた。

力チリツ

ドアが微かな金属音を立てて開くと、そこには『いつもの』菊池の顔があつた。

「学長、一日後の出張先への交通手段と、必要な書類を用意しました」

「一日後の……」

「学長お忘れですか？ 月島泰三氏の米寿を祝つとおつしゃついた件です。出発は明日の夕刻となります」

そうだ……菊池の言つ通り、この学園の卒業生であり、多額の寄付金を寄せているのが月島で、この寮を建設する際にも、彼の寄付金なしでは考えられなかつただろう。その月島が、近々米寿を迎えるのだが、学園の代表としてどのような事があらうとも出席しなくてはならなかつた。

どうやら、自分でも気が付かない内に相当和田美智子の事件に気を取られていたらしい。もう少し、他の事にも気を配らなければ足下をすくわれかねないな……しつかりしなければ。

それにしても、菊池は事件の調査をしていると言つのに、当の本人が忘れかけていた事を良く覚えているモノだ。書類を集めたり、交通手段を調べるだけでも時間が掛かるだろう。有能と言つ言葉は、彼の為にあるのかも知れない。

「失礼……あんな事があつた後で少々気が取られていたらしい。君に言われるまで失念していたよ」

赤岡は自らの間違いを誤魔化そうとはしなかつた。

普段から自らに言い聞かせている事だが、「公明にして正大であれ」と言う言葉を大切にしている。

名門と呼ばれる学園の理事兼学園長と言う立場になれば、きれい事ばかりではその立場を維持できるモノではないのだが、赤岡はそれを実行し続けながら現在の地位を築いてきた。

学園長と理事の地位を保つには、以外と敵は多い。その中で、他人に弱みや隙を見せる事は地位を追われる事を意味する。

そんな世界の中で、赤岡のこれまでの行いは、他者につけ込まれるだけの後ろ暗い事は無かつた。

「公明にして正大であれ」

この事が、今の赤岡に取つては身を助ける一番の武器となつていたのである。そして、この正直な言葉が、小さな波紋を呼ぶ事にならうとは、彼自身考へてもみなかつた。

「あんな……事？」

菊池は、全くその言葉の意味が分からぬと言つ様な顔をしたのである。

「そうだ、事の重大さは君も充分承知しているハズだが？」

一体どうしたと言うのだろう 菊池が和田美智子君の事件について、全く認識していないと言つた表情を浮かべたのだ。

現に、その辺の認識が一番ある菊池だからこそ、事件の調査を任

せたのだが……その菊池が、真っ先に思い浮かべるであろう事を一瞬の事とは言え、忘れるなどとはどうてい思えなかつた。

赤岡は、注意深く菊池の表情を窺つた。

「ああ、和田美智子君の事故の件ですね……」
事故？

確かに当面の間、対外上の事を考へると、事件ではなく『事故』として扱かつた方がいいだろう。

しかし今、菊池が取つた態度にはどこか不自然さが感じ取れた。

「ああ、和田君の『件』だよ」

しかし赤岡は、その疑問や『事件と事故』に拘る素振りは全く見せなかつた。学園長として、また理事として、ライバルとの戦いを勝ち抜いてきた赤岡のポーカーフェイスは相当のモノだ。

先ほどの受け答えの際も、まず菊池にさとられる様な失態はおかしていいはずである。

……

どうして私は、菊池に対してもこの様に警戒をするのだろうか
赤岡は奇妙な感覚に陥りかけていた。

本来菊池は、赤岡に取つて信頼の置ける有能な部下である。
和田美智子の件に関しても、その能力と信頼における人柄と思えばこそ、調査を菊池に一任したのだ。

それがまるで 私は彼を疑つているかの様ではないか。

赤岡は、菊池の異変に気がついたことを、彼自身に気がつかせてはいけないと誓つ、何かしらの予感めいたものを感じていたのである。

ばかばかしい 赤岡はそれを、要らぬ気苦労とつけ捨てようとした……が

とにかく少し様子を見た方が良い。赤岡はその予感めいた感情を、完全に捨て去る事はできなかつた。

「それで、何かしらの進展はあつたのかね」

赤岡は、渡された資料に目を通しながら、菊池の言動を注意深く窺うこととした。

「和田美智子君の事故は」

「うむ」

「彼女の受験に対するノイローゼが原因です」

!!

「……それは、確証のもてる事実なのかね?」

「はい、まず間違いは無いかと思われます」

「ふむ……だがしかし、彼女の成績ならば受験を気にする程では無いと思えるがね。確かに和田君の成績は、学年でもかなり上位に位置すると記憶しているが」

それに、金銭的に困る様な事もあるまい。彼女の実家と言えば、資産家として財界でもかなりの家だ。

となれば、考えられる事は学力の方だが、それについても、常に学年上位の成績をとり続けている彼女に、その心配は低いと思われる。

それに、彼女はまだ一年生である。受験に対するプレッシャーが一番少ない時代だ。

それがどうしてノイローゼとなつて、そして、あの様な騒ぎを起したのか……菊池の説明を、聞かねばなるまい。

「菊池君の調査では、和田君の件は受験によるノイローゼと言う事だが、それはどういう事なのかね。何か確証足り得るモノがあるのだろう?」

「はい、私が今回調査を開始したところ、クラスの中で何名かの生徒から彼女が今から受験に対する不安を持つていたとの証言がありました」

「国府田雅美君からは、その様な話しさは聞けなかつたはずだが?」「和田美智子君としては、一番の親友であればこそ、その関係の中で受験の話を持ち出したくなかったのでしょう。彼女との間だけで、受験とは無縁の世界を保つていたかつたのかと思われます」

赤岡の問いかけに、菊池からは淀みない回答が帰ってきた。

「しかし、ノイローゼと言つことだが、あの夜、和田君の起こした騒ぎは、相当のモノだつたと聞く。それこそ、薬物でも使用していたのではないかと言う程の。その事に関しても、何か分かつた事が?」

「実は、彼女の部屋のトイレから、この様なモノが」

そう言つと菊池は、小さいビニール袋に入った、深緑がくすんだ様な色の紙粘土の様な固まりを取り出した

「これは?」

「多分、大麻の一種だと思われます」

.....

赤岡は覚悟していたとは言え、その事実に驚きを隠せなかつた。

そう どうして菊池はこれ程重要な出来事を、一瞬なりとも忘れていた様な顔をしたのか?

出張の件も、重要な話であることに代わりない。代わりがない

のだが、これ程の事実を知りながら、どうしてあの時、一瞬の間が出来たのか。

そして、その一瞬の後、まるで『スイッチ』が切り替わったかのように、『用意されていた答え』をしゃべり出したのか……

それに矛盾と言えば、大麻と言えば、麻薬の中でもダウン系と呼ばれ、幻覚などを見る事があつても、大騒ぎするモノとは別物だと聞く。

.....

「菊池君、今までの事をレポートとしてまとめられるね」

「はい、ある程度はすでに作成しています」

「私は明日の夕刻から出発し、明後日の米寿の会に出席して、ここに戻るのはさらにその翌日、時間はスケジュール通りだと昼前になるのか……その三日間で、報告書として提出してもらいたい」

「承知いたしました」

「それから

「

「はい、他言無用と言つ事で」

「うむ、そのへんの処理は、君に任せておけば心配は要らないだろう。薬物と和田君の保護者への報告は、私の方から行つのでそれまでは報告を控えるように」

「はい、心得ております。それでは、学長がお帰りになる三日後の正午までに、報告書の方は作成しておきます。私はこれで、失礼させていただきます」

「ああ、頼むよ。私は君を信頼している」

「ありがとうございます。それでは失礼させていただきます
菊池が静かに部屋を去つて行つた。

ふう~

赤岡は、肺の中の空気を、全て吐き出すかのように深いため息をつくと、しばらく目を瞑り、なにやら思案したのちに一本の電話を掛けはじめた。

呼び出し音が数回響いた後、ブツツ と言つ小さな音と共に相手がでた。

「しばらくぶりです、赤岡ですが……上社の万笙ばんしよう先生にお伝え願いたい。一日前の夜、どうしてもお会いしていただきたいと。ええ、連絡は、私の携帯電話の方へ直接。ええ、なにぶん、重要な出来事が起きた……と、お伝えしていただきたい」

赤岡は、何時にも程の真剣な顔つきで電話を切ると、もう一度、深いため息をつくのだった。

つづく

其の七・翁

翁

街にはいくつかの神社があつたが、その神社は比較的街の外れ、小高い山の麓にあつた。

石畳の参道には桜の木々が植えられ、春先になると、その華やかな桜の花びらと相まって美しく映える。

参道を程良く歩くと、古ぼけたはいるが清涼感のある石造りの鳥居が見えて来る。そして、その鳥居をくぐると正面に社殿が顯れる。社殿は正面手前に拝殿があり、その奥に本殿がある一般的な造りをしていて、正面から左手に神楽殿が併設されていた。

神楽殿とは文字通り奉納神楽舞などを行う為の舞台であるのだが、この神社でも、年に数度神楽舞が行われている。

赤岡は一度だけ、その神楽舞を観たことがある。

あれはもう何年も前の事、そう、四・五年も前の頃だらうか、舞手は十一・三の美しい少女だった。

赤岡には神楽舞の知識は無かつたのだが、今思い返しても、その少女の舞はすばらしかつたと思う。

舞は巫女装束で行われていたのだが、静から動へ、また、動から静への動きはもちろんの事、少女自身の美しさが、神楽舞に華やかさと、そして神聖さを加えていたのである。

あの時、あの場に居合わせた者が、すべからく舞に惹きつけられた事は疑いようが無い。

「……に來るのも、あの神楽舞以来になるのか……」

赤岡は社殿の右手に位置する社務所に向かつて歩き出した。

五月のはじめ、昼を過ぎてそろそろ四時にさしかかるうかという時間、社務所に人が詰めている様子は見つけられなかつた。

あまり規模の大きくない神社では、常時社務所に人が詰めている方が珍しい。よつて赤岡は、社務所の裏側にある神主の家へと直接訪ねる事になる。

赤岡が用のあるのは、別にこの神主では無いのだが、上社へ向かう場合には、一応下社の神主へ顔を出す事が決まりとなつてゐるからである。

実は地元の人間でも、この神社に上社と下社があることを知る者はあまりいない。そして、上社へ上がる場合に、下社へ声を掛ける事を知る人間は、それこそ限られた人間のみしかいない。

電話で連絡は入れているものの、その決まりを破ることは、赤岡には到底考えられなかつた。

と言うよりも、そうしなければならない理由が存在したのである。

その理由とは、信じる信じないは個人の自由だが、上社へ向かう道は、通常の者が見つけられぬ様になつていていたからだつた。

結界と言う言葉は、赤岡もその目にするまでは物語や幻想小説の中だけのモノばかりと思っていたのだが、一度でもそれを体験すると、否定する方が難しい。

社務所の横を通り過ぎ神主の家が見えてくると、そこには、下社の神主が赤岡を迎えてくれた。

「どうも、お久しぶりです」

赤岡は、過去に何度か上社に用が出来たことがあり、目の前の神主にもその都度あつてていたのだが、今回も、道案内としての役目を果たして貰う事となつた。

「万笙先生には連絡を入れておきました。どうぞ、こちらです」

その神主は自らの役目を良くわきまえているのか、多くを語らず、

赤岡の挨拶に軽く返辞を返した後、先に立つて入り口までの案内にたつた。

赤岡はゆっくりと、その後を追つ。

下社の神主は社務所の裏を通り、拝殿を横目に本殿の裏側に回ると、何ら周囲の様子と変わらぬ、雑木林の前で立ち止まつた。

このまま雑木林を抜けても裏山に登れそうだ　　と、いつ見ても錯覚するのだが、何度も試しても、どこをどの様に歩いても、すべからく同じ場所へと舞い戻してしまう。

はじめ、道に迷うのは単純に自分の方向感覚が狂っているものとばかり思っていたのだが、それが結界によるものだと聞かされた時、赤岡は妙に納得したことを覚えている。

しかし、これから会いに行く人物ならばそれもしょうがない。

「それでは、これをお持ち下さい」

下社の神主から、一枚のお札のようなモノが手渡された。
長方形で短冊の様な形のそれには、なにやら文様らしきモノが描かれていたが、結界を通る際に必要となるらしい。

赤岡はそれを、内ポケットの中へ大切にしのばせた。

私はこれで　　それを見届けた下社の神主は、一言そう告げる
と、元の方へと去つてゆく。

さて　　それを見届けた後、赤岡はゆっくりと上社への道を、歩みはじめるのだった。

一見獣道の様な、細く幾度も曲がりくねつた道をしばらく行くと、下社と同じように、石畳の階段があらわれた。

記憶では、この先百メートルほど続くのだが、その全てが上り坂なので少々厳しい道のりとなる。

赤岡は石の階段へと足をかけた。

石畠は相当の年月が経っているのか、所々の角が丸くなつていた

り、雨だれの為か、小さなくぼみが出来ていて歴史を感じさせる。

階段はゆっくりと右にカーブして、上へ上へと続いていた。

上社の社殿は、街の方角からは深い木々に覆われていて、この時点では姿を確認することが出来ないのだが、道も中程を過ぎ、やがて終盤へと差し掛かると、そこに、下社よりもやや小さめながらも凛とした雰囲気を持つた建物が見えてくる。

ふう　　と、赤岡はその姿を見ると、呼吸を整える様に息を吐いた。

榊神社、これが赤岡の目指していた場所である。

やがて石の階段も終わり、正面に木造の鳥居を目にすると、そこには一人の好々爺然とした翁が赤岡を待ち受けていた。

「よう来なさつた」

「万筆先生、お久しへりです」

「つむ、もう四・五年になるのかのう、立ち話も無からう、中に茶を用意しておるで、一息つくが良い」

赤岡に先生と呼ばれた翁はそう言つと、促すように、社殿の脇にある自宅の方へと歩きだした。

「一息つけたかな」

その翁は、赤岡が上り坂で呼吸を乱すのを知っていたのか、氷を浮かせた冷たいお茶を用意していた。

「お気遣い、ありがとうございます」

赤岡は冷たいお茶の礼を言つと、姿勢を正した。

「さて、お互い昔話を語るほど、時間がある訳じやないでな

「はい、それでは今日ここに伺つた理由を、お聞き下さい」

赤岡は今まで学園で起きた出来事を、順序よくまとめて万筆へと

語つた。

和田美智子が突然騒ぎを起こして意識を失い、近くの病院へと収容されたこと。そしてその事件を調査した事。その調査をした菊池とこの青年の事。さらにほ、調査報告をした菊池の違和感など、赤岡は自らの感じた事も含めて詳細に語った。

特に、調査報告をした菊池の様子と、和田美智子が未だ目覚めない事に関しては、説明にも力が入った。

赤岡は今朝方病院の方へ連絡を入れていたのだが、和田美智子が未だ目を覚ます様子を見せないと言う報告を受けていた。

「ふむ……それで？ 聞く限りでは、多少気に掛かる部分もあるが、わざわざいこに足を運ぶ様なわけでもあるのかのう？」

「はい、私も通常であれば、和田美智子君の事件をノイローゼと言う形で発表出来ればそれに越したことはありません……しかし2点ほど、先生も気に掛かるとおっしゃった部分だと思いますが、どうしても見逃すことが出来ない部分があります」

「菊池と言う青年の事と、和田と言う娘が目覚めないと言う事かね」「そうです、菊池と言う青年は、先ほども説明したとおり優秀な人間です。その彼がどうしてあの様な結果を報告したのか……それも、いつもと変わらぬ目をして」

「君は菊池と言う青年に、何を見たのだね？」

「そうなのだ……私は菊池が『普段と全く変わらない状態で』あの様な無理のある報告をしたことが、どうしても納得がいかないのだ。赤岡はその事を、どうしても見逃す事ができなかつた。

「通常、催眠術などに掛けられたとして、深層に眠る意識のせいが、どこかその挙動に不自然さが残るはずです……それが、菊池君には見られませんでした」

「催眠術では無いと？」

「ええ……彼の目は全く正常の者と変わりませんでした。それが一番恐ろしいのです」

そうなのだ、彼は自らの発言に『違和感』を感じず、まるでそ

れが『眞実』であるかのように語つたのだ。

「より深く、心の奥深くまでに入り込み、人の心をコントロールする……そしてそれを、全く本人が認知していないし疑問に思う事もない」

「そこに、何らかの呪術の力が働いている……と?」

「分かりません。しかし私には、菊池が何者かに催眠術とは違った方法で操られているとしか考えられないのです」

赤岡も、目の前にいる翁、万笙との出会いがなければこの様な考えは浮かばなかつたはずである。現代において、科学の恩恵を受けながら生きている人間に取つて、呪術だと言つ非科学的な発想など浮かびようが無い。

しかし、非科学的な世界もこの世には存在するのだ。赤岡は知つていた。

退魔士と呼ばれる存在がいる 最初赤岡は、その存在を知識としては知つてはいた。それこそ、小説や物語の中でいくらでもそれを確認できるからである。

その代表的な例と言えば、平安の世に名をはせた陰陽道の安倍清明があまりにも有名だろう。眞実こそは分からぬが、それこそ歴史に名を残し、多くの物語として語られ、現代においてもその人気が衰える事がないのだから。

とはいえた赤岡は、その様な存在を全く信じることが出来なかつた。人の身で有りながら妖魔と戦い、呪を操り、非現実的な出来事を当然の様に行つ存在など受け入れ様が無い。

ともすれば、今でも受け入れたくない気持ちの方が大きい。

がしかし、目の前で繰り広げられた出来事を否定出来るほど、赤岡は割り切れては居ない。

そう 赤岡は、田の前で戦う万笙の姿を見てから、受け入れざるを得なくなつたのだった。

「ふむ、では今回うちに来た理由は、その和田美智子という少女を昏睡状態に陥らせ、菊池と言ひ青年に呪を掛けた者。それを排除して欲しいと言うのかな？」

翁は赤岡の全てを射抜くかの様な鋭い視線を向けて問いかけた。この好々爺の、どこにこれ程の激しさが眠つているのか、疑問に思つ程の鋭さだった。

赤岡は一瞬身のすぐむ思いがしたが、自らの使命を思えば、この視線にも耐えられる。

「どうか、万笙先生のお力を貸していただきたい」

赤岡は翁の視線をまっすぐに見つめ返し、深く頭を下げるのだった。

そんな赤岡の姿を見て翁は、しばらくの間田を閉じて沈黙した後、元の好々爺に戻つて静かに告げた。

「よろしい、今回の事は引き受けましょう」

「あ、ありがとうございます。万笙先生のお力があれば、事件は必ずや明白となるでしょう」

赤岡は胸のつかえがスッ と、おりた気がした。

なぜならば、この田の前に居る好々爺こそ、日本の裏社会に知らぬ者なしとさえ言われた、一代の退魔士であるからである。

「じゃが、今回の件を調べるにあたり、一つ、条件がある」

「は、はあ、私に出来る範囲であれば出来る限り」

「なに、金錢的なモノではないのだが……それと、先に言わせてもらうが今回の件でわしが動くことはないぞ」

え？

「先生それは……」

「まあ待ちなさい。今回の件を軽く見た訳けでも、わし自身が面倒と思つての事でも無いのだが、事件の調査と処理には、わしの一番

信頼する者に任せると言つ事じやよ

「は、はあ」

「なに、学園という場所にわしの様な者が乗り込めば敵にも知れりし、その者どもが身を隠すかもしれんしのお……今回の件には、一番適任な者があるのじやよ」

「それは、そうかも知れませんが……それで、その一番適任と言つ方は今どちらに」

「ふむ、それでは呼んでくるかの」

そう言つと翁は、次の間に居た翁の伴侶へ、その者をここへ呼ぶ様にと告げてまた同じ場所へと座り直した。

「そのお方はこちらにお住いなのですか？」

「おお、住んでおるとも……住んでおるから少々心配でのお

それはどの様な……と、赤岡が理由を問おうとしたとき、ふす

まの向こう側から、涼やかな女性の声が聞こえてきた。

「お祖父様、お呼びでしようか？」

「おお乃亞か、いらっしゃへおいで」

お祖父様……に、乃亞？

赤岡はその人物が、どういった者なのか興味をそそられた。

乃亞と言う名前からすると女性の様だが……そして万笙の事をお祖父様と呼ぶからには、翁の孫と言つ事だらうか？

「失礼いたします」

女性の声が静かに告げると、ふすまが静かに開かれた。

最初は少しだけ、そしてしなやかな女性の指先がふすまにかかると、人一人分のスペースがあけられ、その女性は正座したままその身を滑らせて來た。

一連の動作には全くと言つて隙が無く、優雅ささえ感じられる。予め来客を知らされていたのか、その女性は赤岡の方へ向き直ると、深々と頭を下げる挨拶をしてきた。

「はじめまして、神乃亞ともうします」

神樂舞の 赤岡はその女性を見た瞬間に、あの時観た神樂舞の『少女』の姿を思い返していた。

そう、この少女こそ、神万笙の孫娘であり数年前に赤岡が見た神樂舞の舞手である、榎乃亞さかきのあだった。

「さて乃亞よ、わしから一つ、頼み事があるのじゃが」

翁はそう言つと、孫娘である少女へと向き直つた。

「ここに居るのはわしの古くからの友人の卒でな、今は佐久間学園と言つ高校の理事兼学園長をしておる。もちろん、ここに居ると言う事は相当の理由が合つての事と分かつておると思つが、一つ、乃亞に協力して貰いたい事が出来た」

「お祖父様、それは……」

「つむ、退魔士としての仕事なのじやが、乃亞よ、明日から佐久間学園に入学して、ある事件の調査をしてくれんか

え？

その驚きは、乃亞と赤岡の同時のモノであった。

「赤岡君、この乃亞ならば学園の中でも怪しまれまい」

「え、あ、ですが……」

「なに、実力の方は心配ない。わしのお墨付をじやつて

「は、はあ」

「お、お祖父様、私は

翁は、乃亞の言葉を優しく遮つた。

「なあ乃亞よ、お前は何時までもここに居るべきじやない。過去に拘る気持ちばかりでは何も得る事はない」

「今回の事は、お前に取つても良い機会じや」

……

少女の表情には、苦悶やとまどい、それから不安や逡巡と言つた様々なモノが入り交じつて居た。

赤岡には、この二人の間に何があつたのか推察しようも無い。無いのだが、この乃亞と呼ばれる少女に、何かしらの過去がある事だけは察する事が出来た。

そしてそれは、少女をこの屋敷に縛り付け、外の世界へとつながる事を拒否させる程の深刻なモノであるに違いない。

翁はそんな少女に対し、慈しむような優しい瞳で語りかけた。

「乃亞よ、まずは一歩だ……少しずつで良い、少しずつで良いから、お前には歩き続けて欲しいのじやよ。綾乃の為にも」

少女は、綾乃と言つ言葉に一瞬の逡巡の情を見せた。過去の事と何らかの絡みもあるのか、それは赤岡にも判らない。

場に、しばらくの静寂が訪れた。

この場から一歩、外の世界へと足を踏み出すか出さないか、その葛藤が少女の中で渦巻いている、そんな静寂の間であった。

そんな静寂を作り出したのもこの田の前にいる少女なら、それをうち破つたのもまた、少女だった。

少女は静かにその瞳を閉じたのち、

「分かりました」

と、何かを決意した表情でまっすぐな瞳を翁に向けるのだった

נָאֵם

其の八：敵

敵

「で、これからどうするの？」

午後の授業が全て終わり、教室に残る人影もまばらになつた頃、雅美と雨宮は今後の方針を立てるべく話し合ひをしていた。

「やりたい事はいくつかあるけど、出来る事には限りがあるからな

……

「何よその、やりたい事と出来る事つて？」

「ん？あーなんて説明したらいいのか、まあ、現状いくつかのやりたい事があるとして、その中で、俺たちに出来る事つて限られているんだよ」

「むう～で貴弘、そのやりたい事つてなんなのよ」

雅美は我慢できないと言つた風だった。

「はあ～、雅美つて本当に江戸っ子だよな」

「な、な、何よその憐れみの籠もつた田は！…」

「いやなに、俺の率直な意見をだな……つて、ぐうで握り拳を作るな、ぐうで」

雨宮は一つため息をつくと、氣を取り戻して話を続けた。

「別に江戸っ子が悪いってわけじゃなくて……まあ、その話はおいとくとして、一番最初にやりたい事つて言つのはや、お前と美智子の間の部屋。あそこを調査したいんだけど、じんな時間じゃおいでれと俺が女子棟に行ける分けないだろ。これがやりたいけど出来ない事」

「まあ、この時間じゃ絶対に見つかるからね……」

「それに、部屋の鍵もどうにかしなくちゃならない」

「さうよね、部屋の鍵が無くちゃ結局開けられないわけだし」

「ま、鍵の方は何とかなるとしてもだ」

「何とかって……あんた、まさかして開けられるって言うの？」

「まあ、最後の最後には、キーピッキングって手もあるけど、マス

ターキーを入れる方が現実的かな」

「キーピッキングって……貴弘、あんたさりげなくとんでもない事言つてない？私、あんたが犯人なんぢやないかつて思えてきたんだけど」「

ぶつ

「じょ、「冗談はよせよな。俺がそんな事をする分けないだろ」「どうだか……そう言えば最近、お気に入りのブラ、一枚見つからぬいのよね～」

「くつ、さつきの仕返しか？」

「さあ、何の事だか。で、本当にこれからどうするのよ……貴弘」

雅美は今までの軽口とは違い、真剣な顔つきになつた。

「ああ、まず俺たちがやらなくてはならないのは、美智子の容態を聞く事。あいつが目を覚ましたんなら、酷な話だが、何か聞き出せるかも知れないし、それに、俺たちが犯人を捜し出して良いのかも、美智子に確認をしておかなくてはならないし」

「そうね……もう一日経とうとしてるんだし、美智子も目を覚ましている頃よね。じゃ、今からすぐにでも？」

「そうだな、それも良いかも知れない」

「？」

「何だ雅美」

「それも良いかも知れないって、他にもやれる事があるの？」

「いや、この場合美智子の病院に行くのが一番だ。とりあえず、部屋に荷物を置いてから直ぐにでも行こう。病院はそれ程遠くないとしても、ここを一端おりてから、また戻つてこなくてはならない訳だし」

「うつ、そうか、この時間だと麓までは徒歩だし、帰りはタクシー

でも拾わなくちゃ交通手段がない」「

「ま、タクシー代については心配するな。それよりも、ここは早く行こ!」「

「むひ、ちょっと引つかかるけれど、背に腹は代えられない……か。一端部屋に戻つてから、正門の前で落ち合いましょ」

「正門はよそう」

「どうして?」「

「いや、学校側が、美智子の病院に見舞いに行く事を良くは思わないだろ? 裏から抜けて麓まででよう。今からならバスも残つてゐる……ね、貴弘つて、こいつの状況になれてるでしょ?」「

「なんだそれ。俺は別に

「……」

「それより、行くぞ雅美

「ま、いつか

雅美は江戸っ子らしく、拘る事をしなかつた。

「さてと赤岡君、乃亞を学園に向かわせるとして、君にやつておいて貰いたい事が一つ程ある」

「?」

「いやなに、それ程難しい事ではない。一つは和田美智子君の面会許可を取つておいて貰いたい。どうせ、面会は禁じられているのじやろう」

「はあ……確かに、関係者以外面会謝絶になつて居ますが、未だ目を覚まさない彼女になにか?」「

赤岡のその問いに翁は、笑うだけで答えなかつた。

「それで万筆先生、一つは

「それがもう一つの事。乃亞には、明日にでも学園に向かわせよう」「明日……ですか?」「

「つむ、乃亞には明日向かわせる。それでだ、赤岡君にはその手続きを行つて貰いたい」

「はあ、そちらの方も何とかなると思いますが……その、乃亞君の準備は大丈夫なのでしょうか？」

「その辺は大丈夫だが、その時、乃亞には和田美智子君と、それから国府田雅美君と言つたかな、彼女達の間の空き部屋を充てて貰いたい」

「あの空き部屋を、ですか？」

「うむ、何はともあれ倒れた本人を觀る事と、何より、その部屋を調べるにはこれが一番良いと思うでのう」

「……分かりました。入学の手続きと、部屋を和田美智子君の隣の空き部屋にすれば良いのですね」

「別の場所に部屋が空いておつて、どうしてもこちらに変わると言うのならばそれも仕方がないが、その場合、空き部屋の鍵を乃亞に渡して貰いたい」

「いえ、部屋の方も何とかなるでしよう」

「ならば問題はない。乃亞には明日、直接病院へ寄つてから学園へ向かわせるとしよう……」

「分かりました。それでは、私は直ぐにでもここを立ち、手配を済ませておきます」

そう言つと赤岡は、厚くお礼を述べた後、早速上社を後にした。

「さて乃亞よ……聞いておつたかな」

「はい、お祖父様」

返辞と共に、隣のふすまが静かに開かれた。

「これは退魔士としての仕事になるが、乃亞よ、お前には生徒として学園に行つて貰つ」

「お祖父様、お祖父様なら別にこの様な事をなさらずとも……」

「乃亞よ……学園と言つ隔離された場所に、わしの様な者が行けば、敵に気付かれると言つのは嘘ではない。被害を最小限にとどめるに

は、わしよりも、お前さんに任せた方が良い。これは退魔士としての判断じゃ！」

「……お祖父様がそう言われるのならば、」

「さて、乃亞にも準備があるだろう。必要なモノがあれば後で送るとして、まずは病院に行って、和田美智子なる娘を見てやるが良い」「分かりました」

「後の事は、お前さんに任せよう」

裏庭で待ち合わせた二人は、共に、無言に成りざるを得なかつた。

「聞いた……貴弘

「そつちもか

「じゃ、やつぱり」

「あんなのは噂話だ」

「そんなの当たり前じゃない！美智子が薬をやるなんて、そんな訳ない」

「当然だ、美智子がそんな事するわけ無いだろ」

……

「誰が、あんな噂を」

雅美と貴弘が寮に帰ると、そのうわさ話で持ちきりだった。

和田美智子は、やつぱり薬をやつていた。

美智子の部屋から薬が発見されたんですって。

「ううじや無いかと思つてたんだ。」

無責任な噂は、既に既成事実として広がっていたのである。

「行くぞ雅美」

「貴弘」

「今は、それを誣索する時じゃない」

「だけど……」

「俺だつて気に掛かるで、今回の噂話は前と違つて具体的だ。それに、噂が広まる速度が尋常じゃない」

「じゃ、誰かが意図的に流した?」

「そう考えるのが妥当だな」

「一体誰が?」

「それを探し当てるのは無理だ。噂話の出所なんて、どうやつたつてたどり着ける訳がない」

「でも」

「さつきも言つただろ、それを誣索するのは今じゃない」

「それよりも、美智子の病院へ急ぐぞ

雨宮貴弘の横顔には、殺氣が籠もつていた。

「貴弘?」

「今回の事で分かった事がある」

「それは?」

「敵がいる」

敵

雅美は貴弘の言葉に身震いした。

何者かは分からぬが、少なからず美智子を襲つた『犯人』がいた事は分かつていていたが。

隣に居る男は、『犯人』ではなく『敵』と言つ言葉を使った。

最初から悪意があつた事は確かだろう……しかし、噂話を広めた

事で、『犯人』から『敵』へと変わったのだ。

これで身震いしない方がおかしい。

敵は、倒すモノである

今まで犯人を突き止めるだけだと思いこんでいた。

それが敵となり、倒すモノとなれば、戦わなくてはならない。

犯人を見つけただけではない、それをうち破らなくてはならないのだ。

実際に殴り合いだのをする訳ではないのだろうが、この意識の切り替えは、雅美にとつて劇的な変化だった。

「貴弘、私に出来る事……ある？」

「おう、雅美には、雅美にしか出来ない事が必ずあるぞ」

「そ……なら私も、戦わなくちゃね」

そして、勝たなくちゃね、美智子

雨宮貴弘と国府田雅美は、無言のまま、和田美智子の病院へと向かつた。

和田美智子が入院している友田総合病院は、駅から歩いて10分程度の場所にあった。

ほぼ全ての診療が出来る友田総合病院は、街にある病院の中では群を抜いた規模の大きさだった。そして、友田の名前を冠しているとおりに、経営しているのは友田と言う男だった。

この男は、和田美智子の父親である和田道広をはじめ、各界にも色々と顔の利く男で、そのパイプを利用する代わりに、多少の問題事も面倒をみていた。

菊池が和田美智子をこの病院に入院させたのも、その点にあるのだが、友田は今回の事では頭を痛めていた。

友田は当初、和田美智子は何者かに襲われて、そのショックで意識を失つただけと軽く考えていた。血液検査の結果を見ても、何らかの薬物を投与された形跡も診られなかつたし、襲われたとはいへ、身体に外傷らしきモノも見つけられなかつたからだ。

ところがである、いくらショックを受けて意識を失つたとはいえ、事故からまるまる一日が過ぎた今に至つても、和田美智子が意識を回復する様子が見られなかつたのである。

確かに、精神的なショックなどで何日も意識を回復しない者もいるのだが、今回の患者は財界でもかなり実力があり、また、個人的にも付き合いのある和田道広の娘、和田美智子である。

別に、友田総合病院に非があつた訳ではない。

倒れた場所は佐久間学園の寮の中であつたし、運ばれてきてからの処置や検査にも手落ちはなかつた。

しかし、ここまで意識を回復しないのは些か問題だつた。

友田は和田道広に対して、『心配は要りません、意識もじきに回復するでしょう……』と、答え、一通りの検査以外の精密検査を行わなかつたのである。

外傷は見あたらなかつたとは言え、精密検査を行えば、何か違つた原因が見つけられたかも知れない。

和田道広から、その点を問いただされたならば友田としては立場が無い。

それにして、和田美智子が意識を回復しない原因は、一体何があつたと言うのだろうか……

友田は院長室の深い椅子に腰を掛けながら頭を悩ませた。

今からでも　　友田は精密検査を行なおうと思つた。

明日にも、和田道広が病院に到着する。その前に、尤もらしい答

えを出す為にも、和田美智子の精密検査を決めたとき、ドアをノックするキズは浅くて済む。

友田が、和田美智子の精密検査を決めたとき、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「ンンン

院長先生、例の患者さんに面会の方が訪れていますが……

声の主は、友田が気を許す看護師の一人だった。

少々問題のある患者や、病院内でも秘密裏にしておきたい事などを任せるため、多少鼻薬を効かせている看護師の一人で、例の患者とは、もちろん和田美智子の事をさしている。

学園の関係者ならば和田美智子が未だ目を覚ましていない事を知つてゐるのだから、直接自分の所に来るはず……それを本人に面会したいと言う事は、大方学園の同級生か何かだろう。

「お見舞いならば、事前に話している通りに帰つて貰いなさい」

和田美智子の意識が戻らない今、別に病室に入れるくらいは問題ないのだが、学園の生徒なら、帰つた後に彼女の様子を語るだろう。変な噂でも流されて、彼女が学園に復帰する際、居づらくなる事はなんとしても避けたい。

友田は最初からそう考えて、学園の生徒などのお見舞いは全て遠ざけていた。

「あの、それが……」

その事を知つている筈の看護師が、まだ何か言いよどんでいた。

「何があつたのかね。とにかく入りたまえ」

「はい……失礼します」

その看護師は、院長室へと入ると少し緊張した面もちだった。

「どうしたのだね？」

友田は看護師に尋ねた。

「ああ、あの、学園の生徒だか分かりませんが、この様なモノを携えてきまして、面会をさせて下さいと、言つてきています」

「これは？」

友田は、看護師から一枚の手紙を受け取った。

「和田大造氏が特別に会わせるように？」

「なんだと言うのだ一体？」

「はい、それでどうしたモノかと院長先生に取り次いだのですが」

「しかし……」

「あの、和田氏に電話で確認されてみては？」

「そんな事は分かつとる！」

友田は知らず、声を荒げていた。

「いや、すまん。そうだな、とにかく確認してみよう。その……」

「はい、女性の方です。まだ15・6の高校生の様ですが」

「そうだな、その娘には、応接室で待たせておいてくれないか」

「分かりました」

看護師は、これ以上友田の機嫌を損ねたくないのか、早々に部屋を後にした。

「君が和田美智子君に面会したいと言つ娘かね」「はい」

友田は、看護師が去つた後、早速和田大造へ連絡を入れていた。
「和田氏に確認を取つたが……しかし、未だ美智子君は目を覚ましていない状態でね、病室に入つたとしても会話などは出来ないのだが」

「それで結構です。それに、先生にご迷惑をおかけする事はいたしません」

「いや、別に迷惑がかかると言つ事はないのだが……」

言葉とは裏腹に、友田は目の前の娘に警戒心を抱いていた。

「今はショックから目を覚まさないだけで、彼女には別に危険は無いのだが、少しデリケートな状態である事は事実なのでね」

「ええ、先生の危惧も充分承知いたしております。彼女に、特別何をすると言つ訳ではないのでご安心下さい」

……

正直な事を言えば、和田美智子が意識を回復するまで、外部の者と面会させる気はさらさら無かった。当初の考えと違い、あまりにも美智子の意識が戻らない状態が続き、状況が把握できない時点でこれ以上何らかの失点はなんとしても避けたいと思つていた。

とはいって、和田大造との話では、目の前の少女を会わせない訳にはいかない。

「…………ですが、未だ目を覚まさしていない状態で、娘さんに会わせるのはどうつかと……」

「それでも構わん。榎乃亞と言つ女性が来たら、娘へ面会させて貰いたい。別に君の事を責めている訳ではない。原因は学園の寮で起きた出来事だ」

「…………分かりました。では、その榎乃亞と言つ娘が来たら、美智子君に面会させればよろしいのですね」

「そうしてくれたまえ」

「面会の時間はそれ程長く取れないが、それでも構わないかね」

「はい、5分ほどいただければそれで」

「…………それでは案内しよう」

「お願いたします」

友田は、重い腰をあげた。

வாரு

其の九・接近

接近

「さて、ソニーが和田美智子君の病室だよ」

友田は、乃亞を病室の前まで案内すると、自ら病室のドアを開けた。

今は外部の者が入らない様にと、個室の中でも滅多に使わない大きめの部屋を用意していた。室内には大きめのテレビをはじめ、おそらく他の一般病室とは一線を画したホテルの様な造りになっている。

もちろん、部屋の中は空調が管理されていて、窓を開ける必要はない。

ところがである、友田がドアを開けると、病室の中を五月の爽やかな風が流れ込んでいた。

「おい、この部屋の窓を開けたのは誰だね」「窓が……」

友田が後ろに従つていた看護師に詰問すると、看護師は私じゃありませんと頭を振るだけだった。

そんな友田達のやりとりを横目に、乃亞は友田達の横をすり抜けた様にして病室の中へと入つていった。

「あ、おい君……」

つられる様に友田も病室の中へと続く。

病室は個室となつており、ドアを開けると直ぐに仕切があつて、

全体を見渡す事が出来なくなっているのだが、それをすり抜ける様に乃亞は部屋の中央へと向かつた。

仕切を越えると、正面に開け放たれた窓が見える。中央右手に大きなベッドが設置されていて、和田美智子はそこで規則正しい呼吸を繰り返していた。

乃亞は部屋に入ると、和田美智子の姿を一別した後、開け放たれた窓の方へと急いだ。

「……」

「おい、君。榊君と言つたかな、勝手な事をされては困る」

続けて入ってきた友田は、乃亞が特別何をしている訳でもなかつたので、とりあえず安心したのだが、依然、油断をする気がないのか、それとも自らの威儀を保ちたかつたのか牽制の声をあげた。

「申し訳ありません……」

乃亞が素直に謝るのを見て気持ちを落ち着かせたのか、友田はベッドの上で未だ目を覚まさぬ和田美智子の様子を確かめた。
もしかしたら田覚めているかも知れない　と、僅かばかり期待した友田だったが、規則正しく呼吸を繰り返しながら眠り続ける姿に、淡い期待が消えた。

しかし、落胆した表情を目の前の少女には悟られては行けない。

友田は平静を保ちながら和田美智子の脈を取つた。

脈拍は通常のそれとほぼ変わらないし、呼吸が乱れると言つた様子も見られない。ただ、通常と違う事があるとしたら、一向に目を見ます様子が無いだけだった。

一体、どうしたと言うのだろう……当初の見込みでは、外傷も無

ければ脳波も安定していたし、簡単な検査の結果、これと言つた病気の予兆らしきモノが何一つも見つけられなかつた。

なので、特に詳しい検査も行わなかつたし、きっと直ぐに目が覚めるだらうと、タ力をくくつていたのだが　友田はベッドの上で規則正しい呼吸をしている和田美智子を見て、ため息をつかずにはおれなかつた。

「さて、そろそろ良いかな？」

一通りの作業を終わらせると、友田は一刻も早く和田美智子の精密検査を行いたいと言う思いと、目の前の少女を早くこの病室から返したいと言う思いから、もう良いだらう　と、あからさまな表情を作つて乃亞へと告げた。

先ほど乃亞が病室へ駆け込んだ際、相手が以外とおとなしく自分の言葉に従つた事から、少し強気で出れば、目の前の少女は何も反論出来ないとたかをくくつたのだ。

ところがある。

「申し訳ありませんが、5分程、私と和田美智子さんの一人きりにさせさせていただきます」

「な　」

友田は一瞬、目の前の少女が何を言ったのか理解出来なかつた。
「しかし君、この通り彼女は一向に目を覚まさない状況で、一体何をすると言うのだね……彼女に何かをするのなら、医者としては承知出来ないな」

当初の予想では、とりあえず田の前の少女を病室に入れ、適当に面会させて早々に追い返そうと考えていた。

和田氏からの依頼で仕方なく案内はしたものの、やつてきたのが

高校生らしき少女であつたので、何が出来る訳でもない」と、安易に考えていた。

「この程度の年齢ならば、こちらが少し威圧的に出れば何も言えなくなるだろう」と。

しかし田の前の少女は違つていた。

「和田美智子さんと二人きりになる事も、許可されていると思いましたが」

と、こればかりは少しも引く氣は無いと言った姿勢を見せてきた。

友田としては、これ以上強引に少女の申し出を拒否するわけにはいかない。少女の言うとおり、和田から面会の許可ならず二人きりになる事も承知する様にと、言われていたからである。

「……」

それに、これ以上何かを言えば、田の前の少女を通じて和田の方へも報告が行くに違いない。何を隠している訳ではないが、失態を続いている自分としても、これ以上は強く出られなかつた。

「分かつた。ただし、五分だけだ。彼女はこれから精密検査を受けて貰うのでね、本当は面会も断りたかったのだが……」

友田は最後に、少々ぐぎを差しながらも、了承せずにはおれなかつた。

「ありがとうございます。それでは五分後、私がこの病室から出るまで人が入らない様にお願いします」

「

「分かつた、病室の前に看護師を待たせておくから、時間になつたら看護師に声を掛けてくれたまえ」

そう言つと友田は、付いてきた看護師にドアの前に残る様に指示すると、自分は自らの部屋へと帰つて行つた。

力チャヤ

ドアが軽い金属音を立てて閉まるのを確認すると、乃亞は和田美智子のベッドへと近づいて行つた。

「和田美智子さん……聞こえていますか？ 今から私は、貴女の中へ入ります」

そう言つと乃亞は、親指を自らの額に、そして小指の先を和田美智子の額へと軽く当てるど、小さく何かをつぶやいた。

「我が言は御言なり、我が前に在りし一靈四魂には静を、惡しき四魂を祓い給え清め給え、掛巻くも綾に畏き神伊邪那岐大神……富普加美 恵多目 祓い給え 清め給え」

そして言い終わると共に大きく息を吸い込み、乃亞は和田美智子へと唇を重ねて息を吹き込んだ。

んうつ 和田美智子から吐息が漏れる。

そうした後、乃亞はふわりとして、自らの身体が宙に定まらない状態の中に投げ出されていた。

周囲は深く、真の闇に囚われていて一切の音も無く、宇宙空間に

投げ出されたかの様に自らの位置すら定まらない状態である。

これが、今の美智子さんの状態ですか 乃亞はそつそつとやくと、また、言葉を紡いだ。

「ひ、ふ、み、よ、い、む、な、や、い、たり、もも、ち、ようす」

乃亞の発する言葉は、一切の音も通さぬ暗闇の中でも、透き通る清水の様にこだまする。

「全て世は、陽の昇らぬ事は無い様に、人の心にもまた、陽の昇らぬ事は無く、全ての罪、穢れもまた、その陽によつてうち払われる事でしょう。願わくば氣吹戸主神のお力を持ちて、全ての闇を吹き払い給う事を畏れ多くもお願い申し上げます」

闇に閉ざされた空間の中に、凜とした乃亞の声が響き渡る
すると、何処からとも無く、一陣の風が周囲の闇を巻き込むかの様に吹き荒れると、今までの様子が嘘の様に光りがあふれ出した……
そして、自らの殻に閉じこまるかの様に、膝を抱える一人の少女が現れていた。

乃亞はそれを確認すると、ゆつくつと近寄つて声を掛けた。

「美智子さん……聞こえていますか」

……

「美智子さん、私は榎乃亞と申します。美智子さんを連れ戻しに來ました」

……

「美智子さん、貴女は今、病院のベッドで眠つたまま、夢の中でもさまよつてゐる状態です……あの夜、貴女に一体何があつたのですか」

……

「今はもう、貴女に危害を加える者はここにはいません」

「い……やつ」

「美智子さん？」

「いやつ」

「落ち着いてください。貴女に危害を加えようとした者はここにはいません」

「いやあ！私は誰のモノでも無い！！私は私だけのモノよ……」

乃亞の問いかけに、和田美智子は全ての接触を拒むかの様に、自ら、その両耳を塞いで拒絶の声を挙げた。

これは、彼女が病院に運ばれる前と同じ症状ですね 乃亞は和田美智子がどうしてこれ程までに他者に対して拒絶の体を取るのか、一番興味深い事であつたが、取り合えず、何時までもこのままでは埒があきそうもない。

天天急々如律令！

乃亞は手を組み合わせて印を造り短く言葉を紡ぐと、最後に和田美智子の両肩に気合いを入れるかの様に手を当てる。

「は あ」

と、両肩に手を当てられた和田美智子は、それまでの混乱が嘘の様に、一気に強張った身体から力が抜け落ちた。

静寂の中では、和田美智子の規則正しい呼吸の音だけがこだます

る。

「美智子さん、落ち着きましたが？」

和田美智子が落ち着きを取り戻したのを確認した乃亞は、そつと、囁く様に彼女に声を掛けた。

「私は……」

「気が付きましたか？」

「あ、貴女は？」

和田美智子は、乃亞に声を掛けられて初めてその存在に気が付いた様子だった。

「初めまして、私は榎乃亞と申します」

「ここは……どこ、なんですか」

見渡す限り、周囲には壁一つ無い白色の世界。彼女は数度周囲を見渡すことによって、漸くその異変を認識した様子だった。しかし乃亞は、その質問に答えずに話を続ける。

「美智子さん……と、お呼びしてもよろしいですか？」

「え、ええ。貴女は？」

「私は榎乃亞と申します。美智子さん、貴女は今、病院のベッドの中で眠りについています。覚えていらっしゃいますか？」

「病院の……ベッド……」

「はい、貴女は一日前の夜、何かしらの出来事によつて気を失い、そのまま眠り続けている状態です」

「一日前の……夜……ですか？」

「はい、私は貴女に起きた出来事を確かめるべく、貴女の意識の中に直接会いに来たのです」

え？

和田美智子は一瞬、田の前にいる少女の言葉を理解することが出来なかつた。

いや、出来るはずがなかつた。田を覚ましたと思ったたら、周囲一

辺、見知らぬ場所に立たされて、見ず知らずの少女に『意識の中に直接会いに来た』などと言われて、誰がそれを理解出来ると云つのか。

人は自らの常識の範疇にあるものを基準に判断を行ひ。実際に手に触れたり、その仕組みを解明して理解出来る事象ならば、それは常識として受け入れる事が出来る。しかし、その逆はどうである。意識などと言う、手に取ることも出来なければ見ることも出来ない形のないものであり、その定義すら確立されているとは言い難いもの。

その様なものを、瞬時に理解して受け入れられる者など皆無と言つてよい。

しかし和田美智子は、目の前に立つ少女の言葉を、嘘とは思えなかつた。

そればかりか、事実、ここが『自らの精神世界の中』である」とを、すんなりと受け入れてしまった。

それは、目の前に立つ、自分と同じ位の少女のせいなのか、……それは判断出来なかつたが、とはいえ、この様な突拍子もない話を、不思議に思わない自分に違和感はなかつた。

「榎……乃亞さん、と仰いましたね。私は一体どうしたと言つのでしょうか？それに……」

「乃亞で構いません」

「それでは乃亞さん、私は一体どうしたと言つのですか？一日前の夜に、何があつたと言つんでしょうか。それに、貴女はどうしてこんな

「美智子さん、私は先ほども申したとおり、一日前、貴女に何が起きたのかを調査する為に來たのです。何も、覚えてらっしゃいませんか？」

「一日前……」

「はい、一日前とは言つても、貴女に取つては直前の記憶と言つて

になるのでしょうかね。貴女は一日前の夜、友達である国府田雅美さんの部屋を出てから自室に戻り、それから一時間ほどの後、寮の廊下で何かにおびえる様にして氣を失いました

「私が

何も覚えてないのですね 乃亞は和田美智子の様子から、彼女があの夜の事を記憶していない事を悟った。

何が起きたのかを理解する前に氣を失つた……あるいは 乃亞は病室の窓が開いていた事を思い出す。

記憶を 消された？

和田美智子が、必死に何かを思い出そうとして、それが無駄な努力に終わっている様を見、乃亞はそれが間違いではないと思つた。

それも、自分が病室に来るまでの、何分かの間である事も。

そう 本当に僅かの差で。

「美智子さん、思い出せないのならば無理をしなくても良いのです。ただ、そう言う事実があつた事だけは覚えていてください」

「解らない……私は、本当に一日も眠つたままだつたなんて……解らない」

「はい、解らない事はそのまま良いのです。それを調べるのは、私の役目ですから」

「乃亞さん、一体貴女は？」

「信じてもらえないって結構です……ですが、私は貴女の味方です」

和田美智子は、この初めて会つ乃亞と言つ少女の言葉に、信頼出来うる響きを感じ取る事が出来た。

「あの、こちらに私の友達が入院しているハズなんですが」

国府田雅美は病院の受付に来ていた。

「お名前はなんと言いますか？」

「和田、和田美智子です」

「少々お待ちください」

受付の女性が、手早く手元のパソコンを操作する。

「申し訳ありません、その患者さん、今はまだ面会謝絶になつて、身内の方以外では、お通しする事が出来ない決まりになつています。失礼ですが、貴女は身内の方ですか？」

「い、いえ。私は学校の同級生で身内ではありません」

「そうですか、せつから来ていただきて申し訳ありませんが、面会することは出来ませんので……」

「そり……ですか。それで、美智子はもう、意識は取り戻したんですか？」

「申し訳ありません、それは私の方からはお話することは出来ない決まりになつていますので」

受付の女性からは、やはりお決まりのセリフしか帰つてこなかつた。

雅美は面会が出来ないであらう事を、予め雨宮から聞かされたいたのだが、案の定それが出来ないと知つて、改めて美智子の事が心配にならざるを得なかつた。

「解りました。また、今度来ます」

雅美はしかし、受付の女性にしつこく迫る様なまねはせず、そのまま受け付けを離れると、病院の外で待つていた雨宮と合流した。

「どうだつた？」

「貴弘の言つた通りだつた。まだ面会謝絶だつて……」

やつぱりな　　雨宮は自分の考えが間違つていらない事を知つた。

「それで、これからどうするの貴弘」

「そうだな……取り合えず」

と、そこまで言いかけた雨宮は、ある人物を見て言葉を切つた。

「どうしたの？」

雅美が雨宮の視線の先を追う。

「あれは、生徒会長の……」

「かぶいきまわ木政志だつたな。隣の女の子は誰だか解るか、雅美」

「確かに……鏑木さんと同じ生徒会の先輩だつたと思つけど」

雅美は、鏑木政志といいる少女が、彼といつも一緒に行動しているのを知つていたが、名前がどうしても思い出せない。

「俺も鏑木の事は思い出せるんだが、隣の女の子の名前が思い出せない」

「でも、それがどうしたの?」

「いや、別に……」

雨宮は未だ腑に落ちない顔で、

「何でココにいるのかなと思つてな」

鏑木政志とその女子生徒は、雨宮達に気が付かないまま病院を後にすることだった。

それを見ながら雅美は

「生徒会として、美智子のお見舞いに来たとか?」

「ああ……そうちもな」

「何よ貴弘、一体生徒会長がどうしたの?」

未だ何やら考え方をしている雨宮に雅美は不思議に思つた。

こういう時の雨宮が、何を考えているのか解らない。

「いや何、鏑木といつも一緒にいる割りに、俺が可愛い女の子の名前を知らないって思つてな」

「……」

「貴弘つて、本当に何考えてるか解らないよね

「まあ、冗談はさておき、生徒会長なら美智子が面会謝絶だつて事くらい知つてるはずなんだが」

「でも、一応お見舞いくらいは来るんじやないの?」

「それも……そうだな。とにかく、俺たちも行動を開始するか

「

雨宮はそう言つと、気持ちを切り替えるかの様に、病院の中へと向かつて歩きだした。

つい

其の十・病室

病室

「多分あれだらうな……」

病院の五回、階段を上りきつた後の踊り場の影から覗き込んでいた雨宮は、病室の前に看護師が付いている病室を見つけると、それに対しあたりを付けた。

「だけど貴弘」

雅美も雨宮同様、踊り場の影から少しだけ顔を出して確認する。「あれが美智子の病室だとして、美智子はまだ田を覚ましてないんでしょ。一体どうするの?」

「まあ、病院側が本当の事を言っているかも知れないが、田を覚ましているとも限らない。田が覚めていればそれに越した事はないし、目が覚めていなければ、それを確認するだけで良い」

「うへん、まあそれは良いとして貴弘、一体どうするの?……アレ」と、雅美は病室の前でつまらなそうにしている看護師を指さした。

「雅美」

「なに?」

「お前、今から病気になれ」

「ええ!?

「うん、そうだな、お前は今から『あの看護師』の田の前で貧血になれ」

「ええ!?

「うん、うん、それが良い」

「ちよつと貴弘」

「まあ言つな。お前が高血圧ならまだしも、貧血なんてこの先絶対にあり得ないとは思つたが、今日初めて貧血になれるんだ、喜んで貧

血になれるよな

雨宮はしれつとした顔で言つと。

「初めての経験つて良いモンだろ」「

と、意味ありげな表情で雅美の背中をたたいた。

「絶対にあり得なくて悪かつたわね」

雅美は鬼の形相とひじ鉄で答える。

「うぐつ、まあそれは良いとしてだな雅美様、あの看護師の前で貧血になつてもらえると非常に助かるんですけど」

「……ま、良いけどさ。だけど、私演技なんてした事無いのよ、それに、貴弘じゃ無いけど貧血なんて経験ないし」

「それは何とかなる。貧血の経験が無いんなら、気持ちが悪いって言つても良い。とにかくあの看護師をドアの前から離してもらえば、それでオーケーだ」

「だけど、あの部屋が美智子の病室じゃ無かつたらどうするのよ」

「美智子の病室じゃ無くても、間違えましたで済むさ。それよりもそ、ほら」

と言つて雨宮は、雅美的背中を押しだした。

ちょっと貴弘 雅美は文句を言い掛けたが、病室の前にいた看護師が雅美の姿に気が付いた。

もう、やるしかないじゃない！

雅美は覚悟を決めた。演技の経験など無かつたが、やる事が決まれば江戸っ子の血がそうさせるのか、決断は早い。少しうつむき加減に看護師のいる病室の方へと歩いてゆくと、壁に手を掛けてうずくまつた。

実際、ここまでやる必要があるのか疑問に思つたが、もう、やつてしまつた事は仕方がない。

自分が適当に看護師を惹きつけて貴弘があの病室に入れれば……

「どうしたのあなた？大丈夫」

演技とも知らず、看護師は壁に手を掛けたうすくまつた雅美に気

が付き、駆け寄ってきた。

「す、すいません……私、友達のお見舞いに来ていたんですが、急に眩暈がして……」

「貧血?」

「は、はい、普段から貧血気味で……体育とかも見学が多いんですね……」

と、雅美はいつになく弱々しい風体を装つて看護師の方へと身体を預けた。

ちなみに、雅美の体育の評価は常に5だつた。もちろん、5段階評価である。

「困ったわね、私、ここを離れる訳にはいかないんだけど……それに、人に身体を預ける程の貧血なら、きちんと診てもらつた方が良いわ。ナースコールで誰かに来てもらおうかしり」

「ええっ！」

「わっ、びっくりしたあ、どうしたの突然大きな声を出して」

「い、いえ、貧血気味で力のコントロールが出来なくて」

苦しい言い訳だと解っていたが、これ以上の説明など思いも付かない。それよりも、この場に別の看護師など呼ばれでもしたらまずい

雅美は看護師に預けていた身体を離すと、乾いた笑顔を作りながら言つた。

「あ、あの、いつもの事なので、少し休めばよくなると思うんですけど、下の階に長いすが置いてありましたよね、申し訳ないんですけど、そこまで良いので、肩を貸していただきたいんですけど」

「うん……顔色がさつきより悪くなつた気がするけど」

悪くもなるわよ　　と、心の中で思いつつも、雅美は少し戦法を変える事にした。

「そうですか……解りました。私、一人で戻ります。看護師さんにお仕事がありますものね。私みたいなただの貧血で、看護師さんの大切な仕事のじやまをしては申し訳ありません。ごめんなさい看

護師さん、私がもう少し頑張れば良かつたんですね。じゃ、戻ります」と言つと、弱々しさを保つけつゝも、階段のある方へと向かって歩き始めた。

「ああ、ちょっと待つて……下の長椅子まで大丈夫?なら、やつぱり付き添つて行くわ」

来た! 雅美は内心、相手の看護婦が食い付いてきた事を感じた。

『押してダメなら引いてみな』と言つのは、江戸っ子のお爺ちゃんの言葉だ。生前は、鉄砲玉みたいだった と、おばあちゃんに言っていたとおり、無鉄砲だったお爺ちゃんだが、おばあちゃんに交際を申し込むときにはあの手この手で攻めたらしい。結局おばあちゃんを落としたお爺ちゃんは、何度もその時の話を、楽しそうに語つていた。

雅美はそれを思い出して、実行してみたのだ。

目の前にいる女性も一応は看護師だ。目の前で辛そうにしている人間が助けを断られて、それでも健気な姿を見せれば、放つておけるはずがない…… つて、なんだか私、虚しい気持ちになるのは何だろう。

人をだます事に一生懸命になつてている自分に、雅美は少しばかりの虚しさを感じずにはおれなかつた…… が、ともかくにも目の前の看護師を、病室の前から離れさせるのが第一の目標である。

多少の事には目をつぶるとしても と、雅美は自分で自分を納得させる。

「あ、ありがと「ひ」ざこます……助かります……」

雅美は多少の罪悪感を感じながらも、貧血で苦しむ可憐な少女の役を演じ続けた。

私つて、以外と演技の才能があるのかしら と、いつも多少の勘違いを持ちながら。

だがしかし、この行動のおかげで病室の前に張り付いていた看護師を、階下の長椅子までではあるが、引き離す事に成功したのも事

実である。雅美は看護師の付き添いの元、一階下にある長椅子まで行くために、階段のある方へと歩き出した……

つて！？階段には貴弘がいるじゃない！！
ビビビビビ、ビービーッ。

雅美は階段に向かう途中、その事実に気が付いた。
この五階は一般病室とは違い、限られた人しか使わない場所らしい」と言うのは雨宮から聞いていた話である。

「きっと美智子も、五階の特別病室に入っているに違いない」という雨宮の言葉から、二人はここにやってきたのだ。そして、看護師が病室の前で待機していると言つ、いかにも怪しい場所を雨宮は美智子の病室だと断定し、その為に今こうして、自分がその看護師を病室の前から引き離したのだ。

それなのに、階段で待ちかまえている雨宮が看護師に見つかったら元も子もなくなる。一般病室とは違い、この五階の病室に入院している人達は、『訳ありな患者』もいると言つ。つまりは、雨宮がこの看護師に見つかれば、必ず咎められると言う事だ。

もしその際、上手い言い訳でもあれば良いが、嘘がばれれば、自分の嘘もばれるだらう……嘘がばれれば、学園側にも連絡が行く。

それだけはまずい。

学園側に知られ、厳重注意される程度ならばこれと黙つてなんの問題も無い。しかし、それで学園側からの監視が厳しくなつて、これから行動に制限が加えられるのは上手くない。

事件の調査は始まつたばかりで、これからまだまだやらなければならぬ事は山ほどあるハズ。ここで躊躇して、これから調査がやりづらくなつては、犯人を追いつめられる可能性も低くなる。

雅美は考えれば考える程、冷や汗とも脂汗とも取れない嫌な汗が、

吹き出してくるのを感じた。

「あなた、大丈夫？ 淫い汗だけど……本当に体調が悪そうね。やつぱり先生に診てもらつた方が良いわね」

そんな焦りもつむ知らず、ダラダラと汗をかき出した雅美を、看護師は本当に体調が悪いモノだと勘違いしていた。

「だだだ、大丈夫です。下の長椅子で休めば直ぐにも直りますから」

ひえー

雅美は『本当に』田眩が起きそうだった。

そうだ、お爺ちゃんはこうも言つてたつけ……江戸っ子は嘘だけは付いちやなんねえ つて！！

雅美が混乱に陥っていると、階段の踊り場はもうすぐそこまで迫っていた。

一步、また一步と、どうしよう と言ひ堂々巡りの焦りとは関係なく、階段の踊り場にビヨビヨんと近づいて来る。

も、もうダメだ と、観念したその時、雅美と看護師は踊り場にたどり着いた。

「え？」

と、その光景に、雅美に張りつめていた緊張が、一気に抜け落ちる。

そこには、兩宮の姿は見つけられなかつた。

「はあー」

思わずため息ができる。

「ねえあなた、本当に大丈夫？」

「へ？」

隣で付き添つていた看護士は、雅美の脱力を加減に本氣で心配していだしていた。

「だ、だだ大丈夫です。いつもの事ですから……ははっ」

くく貴弘のやつ、これじゃ本当に貧血になりそうだわ！

雅美は、初めて貧血と言う感覺を知った。

「だけど貴弘、一体どこに隠れたのかしら……」

「さてと……」

雅美はうまくいった様だな。

雨宮貴弘は、雅美が看護師を引きつけて四階へ降りてゆくのを確認すると、手早くその身を病室の前へと滑らせて行った。

階段の踊り場から左に曲がると、廊下を挟んで両側に病室のドアが並ぶ。一般病棟に比べると、五階の病室は大きめに作られているのだろう、個室のドアの数は三分の一程度だった。

看護師がついていた病室は、左側の手前から三つ目。歩数にして二十歩。

一、二、三、四、五、六……

誰かがこの病室に近づいています

乃亜は短くそう伝えると、美智子に向かい直った。

「美智子さん、もうあなたは目を覚ましても大丈夫です。ただ……少しお願いがあります。今からここに来る人は、どうも病院関係者とは違う方の様です」

「私はまだ、目を覚ましていない……と言つ事ですね」

彼女の意図することを察したのか、和田美智子は、乃亜がすべてを言い終わる前に自ら口にした。

「良く、おわかりになりましたね」

「何となくですけど、乃亜さんは、私に起きた事を調査してくださるのですよね。私に取っては全く覚えのないことなので何とも言えませんけど……今ここに向かっている人が病院関係者ではなく、乃亜さんがわざわざそれを伝えると言つことは、その人も調査対象の可能性がある」と

「その通りです。幸い、この病室の中には身を隠す場所があります。この病室に入つてくるかどうかは分かりませんが、もし、この病室に入つてくるならば、私はその者の行動を観察しておきたいのです」「わかりました。それならば、私はまだ眠ったままの『ふり』をしていれば良いのですね……ですけど、近づいてくる人が、病院関係者ではないと、どうしてわかつたのです?」

「それは、近づいてくる者が、不自然な位に気配を消しているからです」

乃亜はそれだけ言うと、和田美智子には聞こえないほどの小さな声で何かをつぶやいた。

すると 周囲が一瞬にして暗闇に包まれ、和田美智子の精神世界から、一人の姿が消えた。

十五、十六、十七、十八、十九、二十……と。

雨宮貴弘は、目指す病室の前に立っていた。

ふむ、目測通りだな

一応周囲に目配せをするが、気が疲れた様子はない。

「もつとも、一般人には見つかるわけもないけどな」

一人つぶやくと、雨宮は病室のドアに手をかけた。

鍵が掛かっている可能性も考えたが、さすがにそこまでは心配いらなかつた。慎重に、音を立てないようにドアノブを回すと、ドア

はすんなりと開いた。

雨宮は素早くその身を病室に滑り込ませる。

この五階にある病室は個室になつており、噂通りに他の一般病室とは違つて完全な防音になつてゐる。訳ありの患者も多いことひびき病室なので、その辺の設備は必要なのだろう。

雨宮はしかし、気配を消すことをやめなかつた。

田の前にある仕切となつてゐる衝立から、素早く病室の中をうかがつた。

もし病室の中で、医者が患者を診てゐる最中だった場合、戦略的撤退を行つ為である……が、雨宮の読み通り、部屋の中には誰もいなかつた。

いや、誰もいないと言つのは誤りである。

部屋の中央右手に大きなベッドがあり、その中で、雨宮も良く知る人物が、今も眠りについていたからである。

「んんっん

もつともらしく咳払いをしてみる。

が、やはり美智子は田を覚ますどころか、声に反応する様子もない。

「……」

よほど眠りが深いのか、それとも未だ田を覚ましていないのか、今の段階では判断出来ない。

雨宮はベッドへと近寄つた。

「おーい美智子、起きろ、朝だぞ……」

今度ははつきりとした声に出して呼びかけてみると、しかし、それに反応する様子は見られなかつた。

「美智子、起きないとキスしちゃうぞ~」

「……」

雨宮は美智子の顔を覗き込むと、一つため息をついた。

今まで、大体予想していた通りだつた雨宮だが、和田美智子が目を覚ましていないことだけが想定外だった。僅かな可能性としては考えていたモノの、本当に目を覚ましていないとは思つていなかつたのである。

雨宮は、未だ和田美智子が目を覚ましていないと言われていたが、それは事件の性質上、見せかけの事だとたかをくくつっていたのだが、考えを改めなくてはならない。

「どうしたものかね……」

雨宮は腕組みをしながら考えた。

雅美が時間稼ぎをしているとは言え、残された時間はそう長くはない。とは言え美智子が目を覚ましていない状態では、手の打ちようがないし、この先事態が展開するはずがない。

強制的に目を覚まさせる方法を考えてみる。

まず、美智子の状態を考えてみよう。何らかの病気を考えれば、強制的に起こす事はやってはいけないだろう……しかし、見た感じでは集中治療の器具がついているわけでもないし、その他、検査器具もつけられていない。と言つひとは、肉体的な要因ではないと言うことか。

だとすれば、内的要因なのだろう。

内的要因　　すなわち心の問題。

あの夜、精神的な問題が起きて、美智子は意識を取り戻さないのか……いや、自ら殻に閉じこもつているのかも知れない。

だとすれば、美智子が目を覚ますのは長引くかもしない。いや、このまま目を覚まさない可能性もあるのではないか。

「……」

それ程までに精神的な衝撃を受ける事は何なんだらう　　と、
雨宮はその事に興味を覚えたが、何にせよ、美智子が起きなくては調査が難しくなる事は目に見えている。

それに、犯人を捕まえるとしても、彼女の意志も確認しておかなくてはならない。

「どうしたもんかね……」

やつぱり強制的に目を覚ましてもらわない事には始まらないのだ
うづか？

美智子もこのまま目を覚まさなければ衰弱してしまうだろう。

雨宮は組んだ腕に力を入れた。

「眠りの姫を起こすには、王子様のキスと相場は決まっているんだ
けど、俺に出来るかどうか」

「

「何が出来るんでしょうか？」

なつ

突然背後から声を掛けられた雨宮は、いつものへらへらとした表情を保つ事が出来なかつた。

つづく

其の一・駆け引き

駆け引き

「何が出来るんでしょうか?」

なつ

誰もいないと思っていた背後から突然声を掛けられた雨宮は、いつものへらへらとした表情を保つ事が出来なかつた。

そして、冷静な状況判断を怠つてしまつた事を悟つた。

雅美を使って看護師を排除したまでは良かつたが、病室の中を良く確認しなかつたのは雨宮の失策である。

病室は入り口の所に衝立があるモノの、それ以外にも個室のトイレなど人が隠れる場所はいくらでも在つたのに、それを雨宮は怠つてしまつたのだ。

何故か　　そう、それは雨宮が人の気配と言つモノを、この病室から『全く感じなかつた』からで、だからこそ目視での確認を怠り、背後からの接近を許してしまつたのである。

氣配を殺していた?いや違うな、氣配を消していたんだ

雨

宮は結果に対しての状況判断を瞬時にし、乃亜への対応を考えようとした。

しかしこれは、乃亜の言葉の前に完全に封じられてしまった。

「この病室は現在、関係者以外立ち入り禁止になつてゐるはずですが、あなたはどうしてこの部屋に?それも

雨宮はこの程度の質問ならば、持ち前の機転を持つてすれば如才なく答えられただろう。

しかしそれを許さなかつたのは、乃亜の次の言葉だつた。

「それも、どうして気配を『殺し』ながら来たのですか？」

「ぐつ
」

正に不意打ちだった。

確かに雨宮は気配を殺していた、しかし、完全に気配を『消して』居たわけではなかった。

いや、出来なかつたと言つた方が正しい。

気配を殺す事は訓練次第でどうとでもなる技術であつたが、完全に気配を『消す』となれば別で、雨宮にはまだまだ完全に出来る事ではなかつたからである。

それを田の前にいる少女、乃亜が不意打ちの様に指摘したのだ。

どういう事だ？

雨宮に緊張が走つた。

全く気配の『無かつた』はずの背後から、突然声を掛けられた。それはつまり……いや、下手な答えを言つよりも相手の観察が先だ　これ以上の失策を許されない雨宮は、質問に答える前に目の前に突然現れた乃亜を素早く観察し、そして分析する事に集中した。

雨宮から見ると、乃亜は年齢が不詳であった。

背格好から推測すれば自分とそれ程変わらない、言つてしまえば同年代なのだろうが、その大人びて見える言動と、吸い込まれそつな程に深い瞳と端正な顔立ちからどうしても実際の年齢よりも上に見えるのだが……雨宮にはその辺の判断がつかなかつた。

いや、実際年齢は上の様に見えるが、それは彼女が持つ雰囲気がそうさせていいるだけで、年は俺と変わらないはずだ　それにしても不思議な雰囲気を持っていると言うのが雨宮の判断だった。

まあその辺は後回しだ

雨宮は状況を分析することにした。

さつきも思ったのだが、もし俺が美智子の敵と過程して声を掛けたにしては、距離的に俺の方が近くにいるのに声を掛けたと言う事は、この程度の距離など問題にならない程度の自信がある　　と言つ事だろ。

雨宮は乃亜との距離を自分の歩幅で正確に四歩だと目測した。だが、この四歩の距離をものともしないのはどうこう事か？

例えば相手がナイフなどの刃物を隠し持っていた場合、そのナイフを取り出すまでの時間でこの四歩の距離を無効とし、凶器を確保した上で相手を無力化する技術　　雨宮は居合いが頭に浮かんだ。しかし田の前の少女は刀剣はあるか、その手には何も握られていない。

つまりは体術のみでこの距離を一頭足のうちに詰めて、相手を無力化出来ると言つ事である。

それとも、田の前の少女は何か飛び道具の様なモノを隠し持っているのだろうか？　　いや、暗器の類を持っているにしても、あまりにも自然体過ぎて考えにくい。

雨宮は改めて田の前の少女を見るが、少女は全くと言つて自然体で、それでいてその瞳から視線をはずせなかつた。

問題はそればかりではない。

全く気配を感じなかつた。

そう、雨宮は乃亜の気配を微塵も感じられなかつたのである。

氣配を『殺して』いたと言つレベルではなく『消して』いた所から考へるに、これ以上不注意に動けば確實に殺られるのはこっちか
雨宮はただならぬ思考に背筋に冷たいモノを感じた。

しかし ではどうして声など掛けたのか？

もし、美智子をこの様な状況に陥れた犯人が、証拠を消すためにこの病室に忍び込んだとして、気配を消せる程のモノが声を掛けるのか？

イヤ違うな……もしかしたら……

雨宮はゆっくりと両手を上げて全面降伏と言つたポーズを取つた。
「気配を殺して来たのは病院関係者に見つからないため。面会謝絶になつてゐるし看護師が病室の前に張り付いていたからな。そして、この病室に来たのは美智子の事件を調べるためだ」

雨宮は正直に語ることにした。

「何故美智子さんの事件を調べているのですか？」

「友達だからだ」

その言葉の後、雨宮と乃亜の二人は互いの瞳から視線を切らさなかつた。

深い瞳だ 雨宮は目の前で自然体でいるにも係わらず、まるで隙が無く、そして容赦もない瞳に吸い込まれそうな錯覚を覚えた。

「美智子さん……起きても大丈夫ですよ」

なに！？

いつまでも続くかと思われた沈黙はしかし、乃亜の方から終焉を告げた。

「良いんですか？私が起きても」

「おまつ、美智子お前……目が覚めてたのか」

なんて事だ！まさか美智子の奴が目覚めているとは 不意打ちにも程があった。未だ美智子が目を覚ましていないと思っていた雨宮にとって、それは不意打ち以外の何者でも無かつたからだ。

「はじめ」、「雨宮君、H子様のキスはあなたのお姫様にしてね」と美智子にからかわれてしまつては、雨宮としては、文字通り『お手上げ』である。

「うう 趣味悪いぞ、美智子

『』の男にしては珍しげ、赤面せずにほおれなかつた。

「でだ、俺は手をおろしても良いのかな？」

予想どおり、どうやら田の前にいる少女は美智子の敵ではないらしいな……雨宮は、未だ上げっぱなしになしだった手のひらを、手持ちぶさたと言つたふうにグーパーとしながらおどけた態度を取つていた。

「どうぞ」と、乃亜はあくまで自然体で答える。

「どうしてだ？」

雨宮の『』の問いは、田の前で終始自然体を貫き通している乃亜に向けてのものだつた。

「どうして? とは、どのような事を指しているのでしょうか?」

「質問に質問で答えるのはどうかと思つが、説明がいるならそうしそう。どうして敵の可能性がある俺に、美智子が起きている事を教えたのか だ。俺があつた場合、もしかしたら事件の事を隠蔽するために美智子を殺す可能性があるにもかかわらずだ」

和田美智子は『殺す』と言つ単語にやつとした。

「あなたの質問にはおかしな所がありますね……別に友達ならば美智子さんが目覚めている事ぐらい知つても良いと思いますけど。それに、敵 と言つのはどういう事なのか……私には解りかねますが」

「ふん、言つてみ

とぼけているのかどうなのか……いや、こいつは絶対に知つてやつているに違ひない。

とはいって、相手は最初から最後まで自然体でいたのだから、俺が勝手に手を挙げただけだって誤魔化せるからたちが悪い

手強いな　　雨宮の乃亜に対する評価はさらに深まった。

どのような状況に陥るうとも、四歩程度の距離では遅れば取らない
い　　雨宮は乃亜に無言でそつ言われた気がしたのである。

「さて、腹を割つて話をしたい」「話と言いますと」

「美智子に事件の時の『記憶』はあつたのか?」

今度は雨宮からの不意打ちだった。この質問を雨宮は、事件の当事者である和田美智子ではなく、名前も知らない乃亜に向かって質問していたのだ。

乃亜が微かに瞳を細める。

「それは直接美智子さんにお聞きになつてみてはどうでしょ?」

「それは後でするさ、その前に俺はお前に聞きたい」

乃亜の雨宮を見る瞳に力が入った。

「どうしてそれを先に私にお聞きになるのでしょうか。私は美智子さんのお見舞いに伺つただけですが」

「さつきも言つたが、とぼけるにも程がある。カマを掛けるのは俺も苦手じゃないが、お互い、痛くもない腹のさぐり合いをしても事件の解決には近づかないと思うがな……それともあんたは、自分一人だけでも充分事件を解決する自信があるのか?」

「…………」

雨宮の遠慮のない問いに、今度は乃亜の方が沈黙した。

先ほどから間断なく雨宮を観察していた乃亜だったが、こう明け透けに言われてしまふと、何処まで目の前の男が事件に関して知っているのか興味をそそられる。

「美智子さんが気を失つて倒れた事を事件と語り、敵と言ひ言葉を使いましたが、あなたはどうお考えのですか？」

「それを聞いたら、お前はオレの質問に答えるのか？」

「それは解りません」

「ふー、どうもこちら側に不利な条件だと思つがな……あんたの立ち位置がはつきりしなければ語れない事もあると思うが？」

二人はまたしてもお互いの瞳を見つめて膠着状態に入った。

雨宮としては、全ての可能性を考えてなるべく手の内は隠しておきたかった。

相手の立ち位置が正確に解らなければ尚更である。もし田の前にいる少女が学園側の人間ならば、学園としては当然雨宮達の行動を制限するだろう。そしてそれは、犯人を隠蔽してしまう事に繋がる可能性があるからであった。

乃亜にしてみれば、これから行う調査の事を口外して回る気はなかつた。

田の前にいる男がどの様に事件と関わりを持つていてるか知らないなら尚更で、自分の立ち位置を教える事で、これから行う調査に支障が起きる可能性がある。

一者一様にこの場でのやり取りには理由があつたのである。

お互いがお互いの立ち位置や、どれだけの情報を持つていてるのか……そして相手の能力がどの程度のモノなのか、この先調査の邪魔になるのかならないのか。

腹のさぐり合いをするべきか、それとも情報を提供し合つのが得策なのか 膠着状態には終わりが無いかとも思われた。

しかし、今度は雨宮の方から沈黙を破る事となつた。

「オーケー解つた」

「何が解つたんでしょう」

「いやなに、オレの目の前にいる女は、強情だつて事がな」

「…………」

「その沈黙は肯定の意味で良いのか？」

「…………」

「悪かつた、オレが悪かつたから沈黙はやめてくれ。冗談に沈黙で
答えられると、オレが堪えるから…………」

雨宮は天を仰ぎながら頭をかいだ。

「だけど一つだけ質問に答える。オレから話を聞きたかったら、そ
れが最低限の条件だ」

「どのような事でしょう」

お前は美智子の味方か？

それは雨宮が普段見せないほどに真面目で鋭い表情だつた。

いくら相手が嘘を隠し通そうとしても、必ず見破れる

そんな決意が読みとれる程の表情で、雨宮を良く知る者が見たら別人か
と思ったかも知れない。

それ程真剣で鋭い視線を、雨宮は乃亜に向けていた。

乃亜はその視線を軽く受け流す事は出来なかつた。

当初は、雨宮の持つている情報などには興味がなかつた。雨宮が
どの様な立ち位置で事件に係わつてゐるのか、それは後で調べれば
どうともなる事だし、こちらの情報を提供するリスクを考えれば、
今、この場で目の前に現れた男にそれを語る理由が全く無かつたか
らだ。

しかし 乃亜は田の前にいる男に興味が沸いたのも事実であった。

気配を殺す技術を持ち、素早く状況判断する能力もある。そして今回の事を事件と呼び、敵という存在を意識する……その様な者が和田美智子の前に現れたのだ、興味を抱かない訳がない。

それに、自分の事でもないのに、これ程真剣な表情を向ける理由にも興味が沸いていた。

だからこそ、乃亜は相手と同じ真剣さで答えていた。

「そうです、私は最後まで美智子さんの味方です」

「ふー」

注意深く乃亜の表情を伺っていた雨宮は、あきらめの表情で溜息をついた。

「あなたの質問は一つだったな……どうしてこの件を事件と呼ぶのか。それからどうしてオレが『敵』と言つ単語を使つたか

「そうです」

短いながらも、はつきりとした返事が返つてくる。

「オレは美智子が情緒不安定で自殺を図つたり、麻薬の類に手を出すような奴じや無い事を知つていて。だから今回のような事は『事件』で無ければ必然性が無い。それから『敵』と言つ単語の件だが……」「……」

ちらりと美智子の方へ視線を向けたが、別に隠しても後に知れる事と判断したのか、言葉を選びながらも包み隠さず真実のみを告げた

「今学園の中では美智子に関してある一つの噂が横行している……美智子が麻薬を使用し、使用したモノの残りが部屋の中から出てきたと言う噂だ」

「それが何故『敵』へと繋がるのですか?」

まるで身に覚えの無い事を聞かされた美智子が、信じられないと言つた表情をするが、それも直ぐに不確かなモノへと変わる。そもそもどうして自分がこの様な病室にいるのかも覚えていないのだ、ふつてわいた様な話に、感情が追いついていなかつたのである。

「その噂が意図的に流された形跡がある」

「その噂の出所が解らない」と言いたいのですか?」

「まあ噂なんてモノは、どうしたつて出所なんて解らないもんだ……その辺はどうしようも無いと思うが、しかし、断定的な情報を元に広がるうわさ話となれば、それを流した人間が絶対に居る無責任な噂なら断定的なモノにはならないだろうが、今流れているのはそんな曖昧なもんじやない」

思い出しても腹が立つのか、雨宮は心底汚らわしいモノを見るかの様な表情で続けた。

「悪意だ……その噂を流した奴の悪意を感じるんだ。その噂の中に今振り返つたとしても、噂が広まる速度も、内容も、それは悪意に満ちたモノである事は間違ひなかつた。

事件が起きた次ぎの日、学園側としては和田美智子の家は相当重要な存在だから、その様な根も葉もない噂話などどの様な状況になろうとも隠蔽しなければならないはずである……しかし、具体的な内容を伴つて噂は流れたのだ。

それは流した人間が居る つまりは、美智子が一度と学園に戻れない様な環境を作り上げた結果と言える……そう、敵意を持つた人物によつて。

雨宮は学園を出る間際に聞いたうわさ話から、必ず『敵』が存在すると断定したのである。

乃亜にもその意図が伝わつたのか、なにやら考える様なそぶりを見せた。

「現状」

今度は乃亜の方から話しかけていた。

「美智子さんの中には、事件に係わる記憶はありませんでした」

「お前……いいのか?」

「あなたは正直に話をして下さいました。ここで私が何も話しをしなければ卑怯と言つものです」

「ん?まあ理屈じゃそうなるがな……正直、お前が話してくれるとは思わなかつた」

「それに、美智子さんに聞けば解る事ですから」

「その一言は余計だがな」

乃亜の一言に苦笑する。

「それで……まあ、これが一番聞いたかつた事なんだが……」

「私がこの件にどの様に係わつてているか…………ですか?」

「話が早くて助かる……が、その話の前に、美智子に少し聞きたい事がある」

乃亜に向かっていた視線を、今度は美智子の方へと向けた。

「美智子、今度の事件に関して、お前は何処まで知つていてる?」

つづく

其の十一・信頼

- 信頼 -

「美智子、今度の事件に関して、お前は何処まで知っている?」

え? 私ですか 急に話をふられた和田美智子は、まるで当事者の意識が無い表情で乃亜と雨宮の二人の顔を交互に見つめた。

「お前は事件の時の記憶がないと言つ。しかし、事件は本当にあった事だ。オレはその事件の犯人を捕まえて白日の下にさらしてやりたいと思ってる……だけれどもだ、お前がそれを望まないのならば、それはオレの自己満足に過ぎない。まあ、犯人を突き止める事は再発防止って意味でもやる事はやるが、もしそれ以上を望まないならオレも考える そう言う事だ」

「とは言つても……私も私がどうなったのか解らないから、感情をもてあましてりうて言つのが正直なところなの」

美智子はこの時になつて初めて困った顔になつた。

「私はあの日、雅美のところでお茶をうちそうになつてから、自分の部屋に戻つて課題をやつていた……つて言つだけで、それ以上もそれ以下も無いの。ただね、何かに囚われるんじゃないかつてそんな漠然とした怖さだけはあつたと思う……ね、雨宮君、逆に私のあの日の事を教えてくれないかしら」

雨宮の問いに、逆に教えてくれと言つ和田美智子。

本当に記憶が無いんだな 頭にこゝろ出せなかつたが、雨宮は事件が一筋縄ではいかない事を悟る。

「オレも雅美に聞いた話だが、それでも良いか?」

一言断りを入れると、今度は真剣な表情の美智子が「クリと首を立てに振った。

「話の内容としては、美智子が知っている事が全てとは言わないが、ほぼそれ以上の事は無いってのが現状なんだ……」美智子が雅美的部屋で一緒にお茶を飲んでいて、夜の十時、ちょうど寮規の時間にお前が自分の部屋に戻った。雅美的話ではそれからちょうど一時間くらいした後、廊下の方が騒がしくなっていたんで外を確認したら、ちょうどお前が何かにおびえる様にして混乱していた。……てな、口までは殆ど誰でも知ってる事だ」

時間に関しては間違いないだろう。……美智子は寮規を守つて絶対に夜の十時には自分の部屋に戻るのよ。……つて、雅美的奴も言ってたからな。

「それでだ美智子、お前は雅美的部屋から戻つてからの一時間、自分の部屋で何をやつてたかは覚えているのか？」

「え……つと、そうね、私はあの日、自分の部屋に戻つてから次の日の英語の予習をやつていたと思う。ううん、そうだわ、確かに次の日の英語で小テストがあるからその為に予習をしていたわ」

「そうか……でだ、その時何か気がついた事とかなかつたか?いや、記憶がそこで途切れているんだっけか」

しかし、実際そんな事があり得るのだろうか?

雨宮は美智子の事を疑う訳ではなかつたが、ある一定の時間帯の記憶だけを消す。……などと言つ芸当が出来るのか、今持つて疑問に思うのはその一点である。

「そうだ、その時お前は窓を開けっぱなしにしていたのか?」

「え? 窓?」

「そうだ、窓だ。あの日、事件の後で雅美が美智子の部屋に着替えとか取りに入つたんだが、窓が全開になつていたんだ」

窓?

雨宮が和田美智子へ質問している間、一言も言葉を挟まずにその様子を眺めていた乃亜が、窓と言つ単語に反応した。

しかし、あまりにもその反応が僅かであったのか、雨宮と美智子がその反応に気がついた様子は無い。

「窓……私、窓を開けたんだ……」

「その辺の記憶は無いのか？」

「…………解らない……なんだか、自分で開けた気もするんだけど……アレ、どうしたんだろ?……どうしたんだっけ……私

「思い出せそうか?」

「…………」

雨宮の問いかけに、美智子は力無く首を振り、自分の記憶が蘇らない事に自分自身が信じられないと言った表情になつた。

その辺から記憶がないのか……益々訳が分からなくな……人間

の記憶は連續したモノだ。例えば何らかのイベントに参加して強烈に印象に残つたとしても、それは連續した映像の中での一コマであつて、ただそれだけの断片的なモノではない。

遠足に行って現地で見た風景も、現地に行く過程と家に辿り着くまでと言つ連續した事象の中に存在する一コマではあるが、やはりそれは限定的な記憶ではなく、遠足と言つ一連の行動内における印象的な記憶と言うだけなのだ。

しかし、田の前にいる和田美智子に関して言えば、勉強していた時、そして今現在病院のベッドで寝ていると言つ記憶があつても、窓を開ける少し前からの記憶がすっぽりと抜け落ちているのだ……

記憶の欠損と言う事は人間には往々にしてあるらしいが、つい先日の事を口々まで見事に忘れるモノなのだろうか?

窓を開けたか開けなかつたかな?意識もせず行う事とは言え、その様な単純な事を、この田の前にいる彼女が忘れてしまつたなどとは考えづらい。

とすれば、強制的に記憶を自分自身で閉じこめたのか……それと

も

「いや、良いよ美智子。無理に思い出さうとしたくなくて」
多分、どんなに思い出そうとしても無理だ　雨宮には確信に

近いモノがあった。

記憶は消されたんだ　と。

正体不明ではあるが、同じ病室にいるもう一人の女……アレ? そ
う言えばオレはこの娘の名前を聞いていなかつたな　雨宮は急
に思い出したかのように気がついた。

何故だ? このオレが女の子の名前を聞かないなんて。

しかもだ、よく見れば学園の中でも滅多にお目にかかる程の
美人……出会つた状況が状況だったとは言え、オレはどうして田の
前の美人に対しての意識が低いのだろう?

雨宮は和田美智子との会話の途中ではあつたが、妙にその点が気
になつた。

どうしたの? 雨宮君

「え? どうしたって、なにが?」

「だつて、なんか難しそうな顔で何か考えてたから……やつぱり窓
を開けたか開けなかつたか思い出せない事、問題なの?」

「あ? ああ、問題と言えば問題だが……それ程問題じゃないさ。窓
を開けるなんて単純な事、誰でも意識せずに行つていい事であまり
にも些細な事だから、忘れても可笑しくはない」

「でも、本当に分からぬの……どうしたのか、今までこんな事つ
て殆ど無かつたからなんだか不安で」

「気にするな　つて気休めも無責任か。それに、美智子にはも
つと不快な事、聞かなくちゃならないからな……」

和田美智子の部屋の中から、ドラッグが発見された　雨宮は、
学園を出る前に聞いた、あの悪意ある噂の事を思い出していた。

少しでも美智子の事を知っている人間ならば、絶対に信じないはずである。内容の噂で、雨宮から見ればバカらしくて聞く気にもならないものであった。

しかしである。そんな信じられない噂が、今、学園の中では尋常では考えられない程のスピードで広がろうとしている。いや、既に広がっていると言った方が良い。

全ての学園生がその噂を信じる訳ではないだろうが、噂とは無責任に広がり、本人の知らないところで事実をねじ曲げる。その点で言えば、今回の噂は美智子が学園に戻るのが苦痛になるはずだった。

今からオレは、それを美智子に聞かなくてはならない。 雨宮はどうやって質問をしたら目の前の少女が傷つかずに済むのか？そんな偽善の様な思考に陥っていた。

それもそうだろう、自分の全くあずかり知らぬところで、自分がドラッグのせいで大声を上げて倒れた。などと噂され、そして一部の人間はそれを信じて好奇の目を向けてくるのだ。

どう考へても傷つかない訳は無い。

しかし、このまま何の知識も無いまま美智子を学園に戻す事はもつと残酷だ。 雨宮は決心した表情でその事実を淡々と語った。

「さつきも少し言つたんだが、美智子の部屋からドラッグらしきモノが発見され、美智子はその薬のせいで混乱状態に陥つたつて噂が流れている」

「そう……そんな噂が流れてるんだ……」

「もちろん、オレは美智子がドラッグなんてやつてないと思つてる。だけど、噂つて言うものは無責任に広がつて、それは本人がどんなに否定しても一部の人間には関係の無いモノに変わつていく事も事実だ」

「うん……よく解る。噂なんてそんなモノだし、誰が流したのかなんて結局のところ辿り着く事なんて出来ないし……でも私、それは

「どうでも良じの」

「え？」

「つづん、やつぱりちよつと悲しいけど、でも、私の事を信じてくれる人もいるから」

「それは絶対だ。大部分の人間だつたら、美智子がドラッグに手を出す奴じやない事くらい解つてる。もちろんそれは、オレや雅美を含めてだ」

「ありがとう……でも、これではつきつしたのかも……」

美智子は、堅く閉じられた自分の拳を真剣な表情で見つめた。

ああ、敵が居る 雨宮は静かにその事実を告げた。

「雨宮君もそう思つんだ……乃亜さんは、どうですか？」
(乃亜？ああそうか、田の前の女は乃亜つて言つのか)

雨宮は先ほどの違和感を思い出した。田の前にいるどこかミステリアスな雰囲気をまとう美少女に対し、妙に興味を持たなかつた事を。

いや、持てなかつたのか？ 雨宮は改めて乃亜といつ少女に興味を持つた。

声を掛けられてから疑問に思つていたのだが、完全に気配を『消して』いた少女。しかも自然体でありながらもどこか隙のない立ち居振る舞い……それに、どうして美智子の病室について、いつの間にか美智子の信頼を勝ち得てしているのか。

美智子とは、どんな関係なのかも今になつて思えば疑問である。

「敵は確實に存在しています」

ん どうしてそんなに断定的に言い切れる？

「私がこの病室に入つた時、窓が開いていました

」

「なに？」

「あの……それが何か？」

「これは私の予測に過ぎませんが、美智子さん、あなたのの中になる事件の記憶は消されたのだと思います……いいえ、実際それは間違いはありません」

乃亜は確信に満ちた瞳で語った。

「それも、私がこの病室に入る何分か前の出来事です」

「え!?」

雨宮と美智子の驚きの声が重なった。

今日、この場で記憶が消されただと！－バカな……そんな事出来るはずが　雨宮は予測していたモノの、自分の予測を遙に上回る展開に驚きの声をあげた。

「ですが、美智子さんが学園からこの病院に運ばれて以来、彼女に接触して記憶を消す時間はそれ以外考えられません」

「ぐつ……！」

確かに記憶を消されているのは間違いない。目の前にいる乃亜に確認する以前に、その事に予感めいたモノもあつたし、実際和田美智子との対話から、雨宮は美智子の記憶が故意に操作されていることを確信すらしていた。

では記憶を消す時間はいつだったのか　雨宮は気がついた。時系列的に考えて、美智子は学園で倒れてから救急車で運ばれ、この病室で意識が戻らずに眠り続けていたのだ。その間、美智子の側に近寄れたのは病院関係者か肉親か……少なくとも第三者がおりそれと接触出来る時間的な余裕など無かつたはずである。
だとすれば、今、自分たちが来るまでの僅かな時間　　その時間で行うしか無い。

「しかし……例えそうだとして、一体誰がこんな短時間で人の記憶を操作出来る？」「

「雨宮さんとしましたね」

乃亜は静かに雨宮へ向かつて声を掛けた。

「あなたは人の記憶を操作出来る事については、何の疑問も持たれないのですね……人の記憶を操作するなど、常識的にはあまり考えられないと思いますが」

「乃亜と言つたか？お前にだつて言える事だと思つが？」

雨宮は疑いの目を向けた。

「この事件の犯人は一体どんな奴なんだ？そしてお前は、一体何者なんだ？」

「…………」

「まだだんまりか？お前がオレに対して疑問を持つよし、オレも少なからず疑問を持つてるんだぜ……少なくとも、一般人とは思えない」

そうだ、気配を完全に消せる技術を持ち、少なくとも四歩程度の距離ならばどんな状況であろうとも相手を無力化出来る程の自信。そして、自分を相手の意識から意図的に興味を無くさせる能力

雨宮は先ほど、不自然な位に乃亜への興味や意識が回避される事に思い当たつた。

そうなのだ、アレは状況云々で目の前の女に興味を持たなかつたんじゃない……強制的に興味を持つ事をそらされていたんだ。そんな事が出来る人間など、雨宮は今まで出会つた事は無かつた。

確かに、古武道などでは相手の視界に入つてゐるにも限らず、その相手の意識からそれる様に動き間合いに入る『技術』と言うモノは聞いた事がある。しかしだ、乃亜という少女は一切の動きもなく、相手が自らを意識しなくなる技術などは聞いた事がない。

いやそれは、もはや『技術』と言つべきモノではない。それは既に『能力』と呼ばれるべきモノなのだ。少なくとも、目の前にいる少女が、普通に暮らしているだけのただの少女とは到底思えない

雨宮は絶対的な確信を持って乃亜を見つめていた。

「一体お前は何なんだ？」

重ねて質問した。

口々で自分の正体を語らなければ、オレはお前を信用出来ない
そんな思いの元に。

「わ、私は……私は……」

乃亜はここにきても、自らの正体をさらす事に躊躇いを持つているのか、雨宮の問いかけに表情を歪めていた。

「わ、私は……」

先ほどまでの平常心が何処に消えたのか、冷静さを失い掛けていると呟つよりも、何かその事を口にするのが心苦しいと言つた、いや苦悶にも似た表情で言葉に詰まっている。

何故そんな表情をする？オレはそれ程目の前にいる少女が答えづらい質問でも下のだろうか？

その苦悶にも似た表情に、あれ程までに高ぶっていた気持ちが急速にしぼんでいくのを意識した。

ちつ オレは何をそんなに焦つてるんだ……

雨宮は乃亜のイメージとはほど遠い動搖した表情に、冷静さを取り戻してきた。

これ程短時間で人の記憶を操作出来る敵が美智子に接触してきた事と、目の前にいる正体不明な少女の為に平静でいられなかつたのだが、よくよく考えてみれば、乃亜と呼ばれる少女が敵であるならば、自分が程度の相手など歯牙にも掛けず倒し、それこそ事件に関する記憶を操作されているに違いない。

となれば、少なくとも乃亜は敵であるはずはないのだ。

それを追いつめる様な真似をするのは憚られた。

田の前の少女は、自らの正体を語りたくとも語れない そう、語る事に対して『恐怖』に似た感情を持つている……雨宮にはそう

思えた。

「悪かったな、お前が自分の正体を明かしたくないのなら別に良い。どうもオレも冷静さを失っていた」

「そうだ、どう考へても目の前にいる女はこの件とは無関係だ。お前が今、この場でその正体を語る必要はない」

「ど、どうして……」

雨富は照れ隠しの様に頭を搔きながら「お前はさつき、美智子の味方だと言つた……それで充分だろ?」

「…………信じてもらえるのですか?」

「あまり初対面の人間を簡単に信じてしまうのもどうかと思つがな。お前はどうなんだ美智子?」

「私? 私は初めから……乃亜さんは良い人だつて思つてたから」

美智子が何の疑いも持たない瞳を乃亜へ向けた。

「人間つてのは著しく本能が退化した動物だつて言われてるけど、そんな中でも良い人間と悪い人間を見分ける本能つてのは、多少なりとも残つてると思つてる。美智子がこう言つてるんだ……オレも信じるしか、ないだろ」

それに、どう見てもあんたが悪人には見えないからな 疑いの目を向けた事に恥ずかしさを感じてか、最後の言葉はこの男にしては珍しく恥ずかしそうにしていた。

「私は……陰陽師と呼ばれる人間です」

「え?」

美智子は驚きの声をあげたが、雨富は乃亜の言葉にそうかと一言静かにうなづいた。

「良いのか?俺達にそれを語つて」

「構いません……私の正体自体、それ程大した事では無いので」

少女はたいしたこと無いと語るが、なりびつして、さつきはその

事を言うのを躊躇つたのか……雨宮は彼女の深い傷の様なモノを感じてしまった。

自分が陰陽師である事　　その事自体を恐れている様な印象を持つたからこそ、その答えを聞く事をやめたと言うのに、乃亜と言う少女が自らそれを語ろうとしていた。

「私は榊万笙の孫、榊乃亜と申します」

乃亜は改めて雨宮に自己紹介をしていた。

「榊……万笙……」

「私の家系は古くから続く陰陽師です」

「榊　　って、あの榊か！？」

「雨宮君、雨宮君は乃亜さんの事、知ってるの？」

知つていると言えば知つている　　雨宮は何か思い当たったのか、驚きの表情で乃亜を見つけた。

「雨宮さんが思い当たつた通り、私の祖父である万笙は、陰陽師としてその名前を残しています……私がこの件に係わるのは、学園長である赤岡氏の依頼を祖父が受け、私が祖父の名代として真相を追求するためです」

「そうか……あの榊家の娘なら　　雨宮は今までの乃亜が行つてきた事全てに納得がいった。」

一般人から見れば何処にでもありそうな名字と聞き流していたかも知れない。しかし、陰陽道に係わる者で、陰陽師の榊、いや、榊万笙の名前を知らぬ者は居ない。

「曰わく、榊の者には近づくな　　雨宮の頭の中に父親の言葉が蘇つてくる。

そのあまりにも強大な能力を持ち、裏の社会を影から支えている一族　　そんな伝説めいた評判が雨宮の持つ知識だつた。

事実、その通りの仕事を行つてゐる事も、そして、彼ら一族が陰陽師達から恐れられている事も知つていた。

強い力とは自分を助けてもらつてゐる内には絶大な信頼となり得る　　しかし、ひとたびその力を目の前にすれば、それは脅威と

もあり得るのだ。

陰陽師　　と言えば聞こえは良いかも知れない。鬼を封じ、邪を調伏し、一見悪しきモノより身を助けてくれる者として存在している。

しかし、陰陽師の仕事はそれだけではない。時の権力者より、呪術にのる暗殺を請け負い、魔を放ち、敵を討つ。

一転すればそれは暗殺者としての一面も併せ持つのだ。だからこそ、強すぎる力は時に畏怖の象徴ともなり得てしまう。歴史として教科書に載るような事は無い。無いが、時の権力者が影で利用し、そして恐れの対象となっているのは間違いの無い事。

そして榊と言えば、国内でも数本の指に入る陰陽師の家系として、裏の社会では敵に回してはならない　　と、恐れられている。

雨宮はもう一度、榊乃亜と名乗った少女を眺めた。

こんな娘が？　　雨宮の前にいる少女は、吸い込まれそうな程の澄んだ黒い瞳と、漆黒を思わせる流麗な髪の毛が印象に残る美人で、大人びた雰囲気を持っている。しかし、それに惑わされる事無く彼女を観察すれば、それは自分と何ら変わらない年相応の少女であった。

誰が見ても、古くから続く陰陽師の家系に育ち、陰陽道に通じているとは思えない。

でも　　ここに雨宮は思い返す。完全に気配を『消す』能力をもち、他人に自分を『意識させない』術。そしてそれを不思議と思わせる事もない。

きっと美智子に記憶が無い事も、『自分で見てきた』のだろう…
…雨宮は乃亜の能力を疑う事は無かつた。今までの行動が、それを納得させるだけのモノであつたからだ。

「正体を隠していた事は申し訳ありませんでした。先ほども申したとおり、私の正体などどうでも良い事でした」

一度その事を認めたからか、乃亜は今度は躊躇なく口にした。

「いや、オレも最初はお前の立ち位置云々って言つてたからな……その事ならオレの方が悪かつた。それに陰陽師と言つならば、オレも多少その末席に連なる家系だ。おいそれと他人にそれを明かさない方が正しい」

「雨宮さんも……陰陽師の家系だったのですね。だから私が陰陽師であると言つのも信じていただけた」と

「まあ、オレなんかは陰陽師と名乗れる程修行したわけじゃないし、才能が無いから佐久間学園なんて通わされてるんだけどな。だけど、別にオレが陰陽師の家系だからってお前の事を信じた訳じゃない」「ど、言つと?」

「だから言つただろ、お前は美智子の味方だと言つた それで充分だ」

「ですが、これから美智子さんの事件を調査するのならば、その事を先に説明しておかなければならなかつたと思います」

乃亜は美智子に向かつて深々とお辞儀をして謝罪をしたが、美智子は慈しみを持つた瞳で微笑んだ。

「乃亜さん、私も別に気にしていません。乃亜さんは私の味方と言つて下さいました。そして私は、私の意思でそれを受け入れたんですけども、乃亜さんがどんな立場でどんな方であろうとも関係ありますせん」

「美智子さん、雨宮さん……ありがとう」

「せひとと、お互ひの事は「これではつきりとした訳だな……で、これからどうするかって話だが、美智子、オレがさつきした質問の答え聞かせてくれるか?」

「それは、犯人を見つけるって事?」

「そうだ、オレは犯人を見つけて絶対にお前の前に引きつり出して

謝らせたい そう思つてゐる。けど、それをお前が望まないなら、犯人を見つける事はするだらうがそれまでだ。学園側からすれば犯人を見つけたところで、闇から闇へ……今度の件はひた隠しにすると思つけど、これから的事を考えれば絶対に犯人は見つけておかなくちゃならない

「でも……それだと雨宮君に危険はないの?」

「なんだ美智子? オレの事心配してくれるのか」

「それは当たり前でしょ、友達を危険にさらすなんて絶対に出来ないわ」

「まあ、ちょっと一筋縄じゃ行かない相手かも知れないが、そりや大丈夫だろう」

雨宮は「それに、力強い味方も出来たしな」と、乃亜の方を向いた。

「乃亜さんも……犯人を見つけるんですね」

「はい、元々お爺さまへの依頼も、事件の真相を明らかにする事そしてそれは犯人を見つけてその能力を封じる事に繋がりますから」

「危険は、無いんですか?」

「大丈夫です。私は私の持てる全力を以て美智子さんをお守りします」

「いえ、私ではなく、乃亜さん、あなたに危険はないのか」と、聞いたんですね

「ど、どうして私の事など?」

「だつて友達に、危険な事なんてさせられません」

え? 乃亜は真摯な瞳を向ける美智子に息をのんだ。

「わ、私は……私の事なんて……」

「それとも、乃亜さんは私と友達になつて下さいませんか?」

「み、美智子さんは、私の事を知らないから」

」

「乃亜、さっきの言葉、聞いてなかつたのか？オレや美智子は、お前が何者であるうと信じるつて決めたんだぜ。それじゃダメなのか？」

この時乃亜は、自分の中にある感情の表現方法が解らなかつたが、一つだけ確かな事があるとすれば、それは自らの瞳から落ちた一筋のしづくが全てを語つていた。

づく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6050d/>

古神道

2010年10月9日22時12分発行